

私説「孫子兵法」

ドラフト版

はじめに

ノート用です。十分な余白を取っています。メモりたいからです。ドラフト版です。他のテキストと異なる理由にて誤字脱字と決めつけるは早計です。殆どは意図的です。

「孫子」[一]を参考に篇の名称と順番を入れ替えています。

「新訂 孫子」[2]を参考に「九変」の冒頭を書き換えています。

「戦わずして勝つ 孫子兵法」[3]の「第3部資料 孫子兵法校記」を参考に銀雀山漢墓出土の竹簡版を「積極的に」取り入れています。

#	流布版	本資料
1	計	計
2	作戦	作戦
3	謀攻	謀攻
4	形	勢
5	勢	形
6	虚実	九変
7	軍争	軍争
8	九変	実虚
9	行軍	行軍
10	地形	地形
11	九地	九地
12	火攻	用間
13	用間	火陳

句読点は誰かの解釈です。ほんらい漢文に句読点はないと聞いて、空白に置き換えています。

否定文が判り易いよう、読み下しにおいても「不」を漢字にしています。特に二重否定に留意です。

第一篇「計」勝敗の計算

一 軍事は国家の大事

孫子曰 兵者国之大事也

孫子曰く。

兵は国の大事なり。

死生之地 存亡之道 不可不察也

死生の地、

存亡の道、

察せざる可から不なり。

孫先生は云います。

軍事は国家の大事です。

死と生を分ける戦地や、

存在と滅亡を分ける道理は、

推察しないわけにはいかないのです。

故経之以五

ゆえ これをおさ
故に之を経むるに五つを以てす。

校之以計

これ こう
之を校するに計を以てす。

而索其情

しか そ
而して其の情を索む。

一日道 二日天 三日地 四日将 五日法

いち いわ みち
一に曰く道、

に いわ てん
二に曰く天、

さん いわ ち
三に曰く地、

し いわ しょう
四に曰く将、

ご いわ ぼう
五に曰く法。

だから、軍事を計量するのに五つです。

※以降、慣習に従い「五事」と記します。「五量」

計量結果を比較するのに計算です。

※以降、慣習に従い「七計」と記します。「七関数」

計算のために、その情報を探索しています。

第一に「道」と云います。

第二に「天」と云います。

第三に「地」と云います。

第四に「将」と云います。

第五に「法」と云います。

道者 令民与 上同意者也 故 可与之死 可与之生 民弗詭也

道とは、

民に与して、

上と意は同じなり。

故に、

之と与す可く死し、

之と与す可く生くして、

民詭弗るなり。

「道」とは、

庶民と仲間になり

君主と一意同体となるのです。

そして、

国家の仲間だから死ねるし、

国家の仲間だから生きて、

庶民は詭らなくなるのです。

※ 道理です。

天者 陰陽 寒暑 時制也

順逆兵勝也

天とは、
てん

陰陽、
いんよう

寒暑、
かんしよ

時制なり。
じせい

順逆、
じゆんぎやく

兵勝なり。
へいまたる

「天」とは、

天候の明暗と、

気候の寒暖と、

時間の制限です。

順行と逆行の双方を用いて、

軍事に勝ります。

※ 時間です。

地者 **高下** 広狭 遠近 險易 死生 也

地とは、

高下、

広狭、

遠近、

險易、

死生なり。

「地」とは、

高い低い、

広い狭い、

遠い近い、

険しさと易しさ、

死と生です。

※空間です。

将者 智 信 仁 勇 嚴也

将しやうとは、

智ち、

信しん、

仁じん、

勇ゆう、

嚴げんなり。

「将」とは、

智恵、

信頼、

仁愛、

勇氣、

威嚴です。

※五常です。勇が「礼」で、嚴が「義」です。

法者 曲制 官道 主用也

法とは、
ほう

曲制、
きよくせい

官道、
かんどう

主用なり。
しゅよう

「法」とは、

編成の制度、

将官の規定、

軍事の運用です。

※ ポリシー、ルール、プロシージャーです。

凡此五者

凡そ此の五つ、

将莫不聞 知之者勝 不知者不勝

将聞かざる莫きも、

之を知るは勝ち、

知らざるは勝たず。

故 校之以計 而索其情

故に、

之を校するに計を以てして、

其の情を索む。

およそこれら五事は、

指揮官は聞かないはないのです。

これを知るなら勝ちます

知らないなら勝たないのです。

※ 五事を定量的に知る

だから、

五事の優劣を比較するために七つの計算を用います。
その情報を探索するのです。

三 七計

曰 主孰道 将孰能 天地孰得 法令孰行 兵衆孰強 士卒孰練 賞罰孰明

曰く、

主、孰れか道なる、

将、孰れか能なる、

天地、孰れか得たる、

法令、孰れか行なわる、

兵衆、孰れか強き、

士卒、孰れか練いたる、

賞罰、孰れか明らかなる。

吾以此 知勝負矣

吾此れを以て、

勝負を知る。

比較の内訳です。

- 一．いずれの最高司令官が道理に沿うのか
- 二．いずれの現場指揮官が賢能なのか
- 三．いずれが天地から恩恵を得ているのか
- 四．いずれの法令が遵守されているのか
- 五．いずれの庶民兵が強いのか
- 六．いずれの士官兵が熟練しているのか
- 七．いずれの賞罰が明らかに実施されているのか

内なる私はこれら七計により、
勝負の結果を知ります。

四 勢力は権勢を決める

將聽吾計 用之必勝 留之

將吾が計を聴きて

之を用うれば、必ず勝つ、之に留まらん。

將不聽吾計 用之必敗 去之

將吾が計を聴かずに

之を用うれば、必ず敗る、之を去らん。

計 利以聽 乃為之勢 以佐其外

計、利として以て聴かれるれば、

乃ち之が勢を為して、

以て其の外を佐く。

勢者 因利而制權也

勢とは利に因りて権を制するなり。

最高司令官が、内なる私の計算を聴いて、結果を運用する
なら、必ず勝ちます。ここに留まります。

または、将官が計算を聴いて、結果を運用するなら、必ず
勝ちます。ここに留めます。

最高司令官が、内なる私の計算を聴かずに、結果を運用す
るなら、必ず敗れます。ここを去ります。

または、将官が計算を聴かずに、結果を運用するなら、必
ず敗れます。ここから去らせます。

計算が有利だと聴かれるのなら、
これが勢力となって、
計算の外側を助けるのです。

※ 虚数項です。

勢力とは、有利に起因して、権勢を決めるのです。

※ ポテンシャルです。

五 軍事の詭く道理

兵者 詭道也

へい きどう
兵は詭道なり。

故能而示之不能

ゆえ のう
故に、能にして之に不能を示す。

用而示之不用

よう
用にして之に不用を示す。

近而示之遠

ちか
近くして之に遠きを示す。

遠而示之近

とお
遠くして之に近きを示す。

軍事は、詭く道理です。
あさむ

だから、能力があっても、敵方に能力なしと示します。

用いる事象は、敵方にそれを用いないように示します。

近くなら、敵方に遠いと示します。

遠いのなら、敵方に近いと示します。

利而誘之 乱而取之

利りにして之これを誘さそい、乱らんにして之これを取とる。

実而備之 強而避之

実じつにして之これに備そなえ、強きやうにして之これを避ひける。

怒而撓之 卑而驕之

怒どにして之これを撓みだし、卑ひくにして之これを驕おごらしむ。

佚而勞之 親而離之

佚いつにして之これを勞ろうし、親しんにして之これを離はなす。

攻其無備 出其不意

其その無備むびを攻せめ、その不意ふいに出いず。

此兵家之勢 不可先伝也

此こ兵家へいかの勢いきおいにして、先さきに伝つたう可べから不ずなり。

利益にて敵方を誘い、混乱させて敵方から奪い取ります。

充実しているなら敵方に備え、強大なら敵方を避けます。

怒りにて敵方をかき乱し、謙虚さにて敵方を驕らせませます。

安佚あんいつにて敵方を疲労させ、親交にて敵方を離間させます。

※ 「安佚」は気楽に過ごすさまの意味

敵方の無防備を攻め、敵方の予想していない行動に出ます。

これが戦略家の勢力です。

作戦実行の前に伝えてはならないのです。

六 廟の計算で勝負は現れる

夫 未戦而廟算 勝者 得算多也

夫れ未だ、戦わずして、廟算する。

勝つは、算を得る多いなり。

未戦而廟算 不勝者 得算少也

未だ戦わずして、廟算する。

勝たざるは、算を得る少ないなり。

多算勝 少算不勝

算多きは勝ち、算少なきは勝たず。

而況於無算乎

而るに況や算無なきに於いてや。

吾 以此觀之 勝負見矣

吾、此れを以て之を観れば、勝負は見える。

※ 五つの定量値を七つの関数に入れる計算イメージ

そもそも戦わないうちに廟堂で計算します。

勝つ側は、五事七計の評価得点が多いのです。

戦いもしないのに廟堂で計算しています。

勝てない側は、五事七計の評価得点が少ないのです。

評価得点の多い方が勝ち、少ない方が勝ちません。

ましてや評価得点が無いのでは、全く勝つ見込みなしです。

内なる私が廟堂における五事七計の計算によって戦闘を相観すれば、既に勝負の結果は現れているのです。

第二篇 「作戦」 利益の計算例示

一 進軍は日に千金を費やす

孫子曰 凡用兵之法 馳車千駟 革車千乘 帶甲十万

孫子曰く。

凡そ兵を用うる法は、

馳車千駟、革車千乘、帶甲十万。

千里而饋糧 則外内之費 賓客之用 膠漆之材 車甲之奉

日費千金 然後十万之師挙矣

千里にして糧を饋れば、

則ち外内の費、賓客の用、膠漆の材、車甲の奉、

日に千金を費して、

然る後に十万の師挙がる。

孫先生は云います。

軍事を運用するおおよその方法です。

輕戦車千台、重戦車千台、甲冑武装兵十万の規模です。

千里の距離に兵糧を輸送するには、

外と内の費用、他国使節団の接待、工作用の材料、戦車や

甲冑の提供に、

一日に千金を費やして、

準備の後に十万の軍隊を動かせるのです。

二 持久戦は事後処理不可能

其用戦 勝久 則鈍兵挫銳

其の戦いを用うる。

勝つも久しければ、則ち兵を鈍らし鋭を挫く。

攻城則力屈 久暴師則国用不足

城を攻むれば、則ち力を屈す。

久しく師を暴せば、則ち国用足らず。

夫頓兵挫銳 屈力殫貨 則諸侯乘其弊而起

夫れ兵を頓しめ鋭を挫き、

力を屈し貨を殫くさば、

則ち諸侯、其の弊に乗じて起こらん。

雖智者 不能善其後矣

智者と雖も、其の後を善くする能わ不。

遠征の戦いを運用してみます。

勝つまで持久戦となるなら、軍を鈍らせ鋭さを挫きます。

城を攻めれば、戦力が尽きてしまいます。

遠征軍が持久戦を続けると、国家の財は足りなくなります。

そもそも軍を頓挫させ鋭さを挫かれ、

戦力が尽きて、財も乏しいなら、

他国の諸侯は、その疲弊につけてこんで軍を起こします。

いかに智恵の人であっても、この事後処理を巧妙にはできないのです。

四 軍事運用の利害

夫 兵久而国利者 未有也

夫れ兵久しくして国に利あるは、

未だ有らざるなり。

故 不尽於知用兵之害者 則不能尽知用兵之利也

故に

尽く兵を用うる害を知らざるは、

則ち尽く兵を用うる利をも知る能わざるなり。

そもそも持久戦になり、国家に利益をもたらすなど、
今までになかったことなのです。

このために、

軍事を運用する損害を知らないのでは、
軍事を運用する利益をも知れないのです。

五 食糧を敵方から調達

善用兵者 役不再籍 糧不三載

善く兵を用うるは、

役、再籍せず、

糧、三載せず。

取用於国 因糧於敵

用を国に取り、

糧を敵に因る。

故 軍食可足也

故に

軍食足る可しなり。

巧妙に軍を運用するのは、

庶民に二度も軍役を課したりはしないのです。

食糧を三度も前線に補給したりはしないのです。

用具は自国で調達します。

食糧は敵方から調達します。

このようにするから、

兵糧は十分にまかなえるのです。

六 六割の削減

国之貧於師者 **遠者** 遠輸 則百姓貧

くに くに 師に 貧しきは、

とお 遠きは 遠く 輸れば、

すなわ 則ち 百姓 貧し。

近市者 貴売 貴売 則百姓財竭 財竭 則急及 **丘役**

いち 市に 近いは 貴売す。

きばい 貴売すれば、

すなわ 則ち 百姓の 財竭く。

さいつ 財竭くれば、

すなわ 則ち 丘役は 急に 及ぶ。

国家が軍隊のために貧しくなるのは、
遠征時に遠くまで物資を輸送すれば、
農民は貧しくなるからです。

近くに軍の市場があると、物価が高騰します。
物価が高騰すれば、
農民の財産が尽きます。
財産が尽きれば、
農村の軍役は切迫するのです。

屈力中原 内虚於家 百姓之費 十去其六

中原に屈ちゆうげんきる力つ、
ちから

内は家うちに虚いえしく、
むな

百姓ひやくしやうの費ひ、

十じゆうに其その六ろくを去さる。

公家之費 破車罷馬 甲冑矢弩 戟楯蔽櫓 丘牛大車 十去其六

公家こうかの費ひ、

破車はしや罷馬ひば、

甲冑かつちゆう矢弩しど、

戟楯げきじゆう蔽櫓へいろ、

丘牛きゆうぎゆう大車たいしや、

十じゆうに其その六ろくを去さる。

遠征先にて国力が尽きます。

国内では家財がなくなり、

農民の生活費は

六割まで削減されます。

※ 「まで」なので、四割の削減です。

国家の運営費は、

戦車の破損や軍馬の疲労、

武器や武具、

輸送用の牛や大車のために、

六割まで削減されます。

※ 「まで」なので、四割の削減です。

七 二十倍の節約

故 智將務食於敵

ゆえ
故に

智將は務めて敵に食む。

食敵一鐘 当吾二十鐘

てき いっしゅう
敵の一鐘を食むは、

われ にじゅうしゅう あた
吾が二十鐘に当る。

慧秆一石 当吾二十石

きかんいつせき われ にじゅうせき あた
慧秆一石は吾が二十石に当る。

だから

遠征軍に務める智將は、敵の兵糧を調達するのです。

敵方の兵糧を食する量に比べて、

自国から輸送に要する量は、二十倍に相当します。

牛馬の飼料も同様に、二十倍に相当するのです。

八 敵方を身方にして養う

故 殺敵者 怒也 取敵之利者 貨也

故に

敵を殺すは、怒なり。

敵の利を取るは、貨なり。

故車戦得車十乗已上 賞其先得者

故に車戦にして車十乗已上を得れば、

其の先に得たる者を賞す。

而更其旌旗 車雜而乘之 卒共而養之

而してその旌旗を更め、車は雜えて之に乗らしめ、

卒は共とし、之を養う。

是謂勝敵而益強

是を敵に勝ちて強を益すと謂う。

そして、

敵方を殺すのは、憤怒です。

敵方の利益を奪い取るのは、財貨です。

だから車戦で車十台以上を得れば、

その最初に得た人物を賞します。

敵方の旗印を身方に取り替えて、その戦車に身方と混じって乗ります。

敵方だった兵卒を、身方と同じように扶養します。

これを敵方に勝って強さを増すというのです。

九 国家安危の主人公

故 兵貴速 不貴久

故に

兵は速なるを貴ぶ。

久しきを貴ばず。

故 知兵之将 民之司命 国家安危之主也

故に

兵を知る将は、

民の命を司る。

国家安危の主なり。

こういう次第にて、

軍事は迅速が貴重です。

長引くのは貴重ではありません。

そして、

軍事の利害を知る現場指揮官は、

庶民の命を司ります。

国家の安全と危険の瀬戸際における主人公なのです。

第三篇 「謀攻」 自他不敗

一 国を全うするは上策

孫子曰 凡用兵之法 全国为上

孫子曰く。

凡そ兵を用うる法は、
国を全うするを上と為す。

破国次之

国を破るは之に次ぐ。

孫先生は云います。

軍を運用するおおよその方法です。

国を保全するのが上策です。

国を破壊するのは次の策です。

二 軍を全うするも上策

全軍為上 破軍次之

ぐん まつと
軍を全うするを上と為し、
ぐん やぶ これ っ
軍を破るは之に次ぐ。

全旅為上 破旅次之

りよ まつと
旅を全うするを上と為し、
りよ やぶ これ っ
旅を破るは之に次ぐ。

全卒為上 破卒次之

そつ まつと
卒を全うするを上と為し、
そつ やぶ これ っ
卒を破るは之に次ぐ。

全伍為上 破伍次之

ご まつと
伍を全うするを上と為し、
ご やぶ これ っ
伍を破るは之に次ぐ。

「軍」^{ぐん}となる軍団を保全するのが上策です。

軍団を破損するのは次の策です。

※ 将軍の現場指揮系統

「旅」^{りよ}となる旅団を保全するのが上策です。

旅団を破損するのは次の策です。

※ 五百人将の現場指揮系統

「卒」^{そつ}となる大隊を保全するのが上策です。

大隊を破損するのは次の策です。

※ 百人将の現場指揮系統

「伍」^ごとなる小隊を保全するのが上策です。

小隊を破損するのは次の策です。

※ 伍長の現場指揮系統

三 最善は戦わずに引かせる

是故 百戦百勝 非善之善者也

是の故に

百戦百勝は、

善の善に非ずなり。

不戦而屈人之兵 善之善者也

戦わずして人の兵を屈するは、

善の善なり。

したがって、

百回戦闘して百回勝利するのは、
最善の策ではないのです。

戦わずに敵方の軍事力を屈服させて、
最善の策なのです。

四 上策は策謀

故上兵伐謀

故に、

上兵は 謀を伐つ。

其次伐交

其の次は 交わりを伐つ。

其次伐兵

其の次は 兵を伐つ。

其下攻城

其の下は 城を攻む。

だから

上策の戦闘は、策謀を討伐します。

その次は、外交関係を討伐します。

その次は、軍隊を討伐します。

最も劣る下策は、城を攻めることです。

五 城攻めの災い

攻城之法 為不得已

攻城の法は、

已むを得ざる為す。

修櫓輜輳 具器械 三月而止成 距闐 又三月然而後已

櫓と輜輳を修め、器械を具う。

三月にして止めて成る。

距闐、又、三月にして然して後に已む。

將 不勝其忿 而蟻附之 殺士卒三分之一 而城不拔者 此攻之災也

將、其の忿に勝え不して、之に蟻附し、

士卒を殺すの三分の一にして、

而も城の抜け不るは、

此れ攻の災いなり。

城を攻める方法は、
やむを得ずに行ないます。

おおだて
大盾と四輪車などを整備し、城攻めの道具を用意します。
三カ月かけて他の軍事を止めて成し得るのです。
攻撃用に土を高く積む土木作業も同様に、三カ月してようやく完成します。

將官が準備を待ちきれずに、怒りをおさえきれず、蟻のよ
うに城につけ、身方兵の三分の一を戦死させたにも関わらず、
城が落ちないのです。
これこそ城攻めによくある災難なのです。

六 謀攻の方法

故善用兵者 屈人之兵 而非戰也 拔人之城 而非攻也

破人之国 而非久也

故に善く兵を用うるは、

人の兵を屈するも、戦うに非ずなり。

人の城を抜くも、攻むるに非ずなり。

人の国を破るも、久しきに非ずなり。

必以全争於天下 故 兵不頓 而利可全 此謀攻之法也

必ず全を以て天下に争う。

故に

兵頓れ不して利全うす可し。

此れ謀攻の法なり。

それゆえ、巧妙に軍を運用すると、

敵方の戦力を屈服させるにしても、戦闘によらないのです。

敵方の城を陥落させるにしても、城攻めによらないのです。

敵方の国を撃破するにしても、持久戦によらないのです。

必ず国は保全されて、天下に国益を争うのです。

だから、

軍は破れることなく、利益は保全されます。

これが策謀にて攻める方法なのです。

七 小敵の堅は、大敵の擒なり

故 用兵之法

故に

兵を用うる法、

十則圍之

十なれば則ち之を圍み、

五則攻之

五なれば則ち之を攻め、

倍則分之

倍すれば則ち之を分かち、

そこで、

軍を運用する方法です。

十倍であれば包圍します。

五倍であれば攻撃します。

二倍であれば分断させます。

または、

二分して挟み撃ちにします。

敵則能戦之

敵てきすれば、

則すなわち能よく之これと戦たたかい、

少則能逃之

少すくなければ、

則すなわち能よく之これを逃のがれ、

不若則能避之

若しからざれば、

則すなわち能よく之これを避さく。

故 小敵之堅 大敵之擒也

故ゆえに

小敵しょうてきの堅けんは、

大敵たいてきの擒とりこなり。

匹敵して等しければ、

対戦に挑めます。

少なければ、

交戦から逃られます。

及ばなければ、

敵方を避けられます。

こういう次第で、

少人数の敵方に対し堅強に戦うなら、

大人数の敵方に対し捕虜にされてしまうのです。

八 最高司令官のメランコリー

夫將者 国之輔也

夫れ將は

国の輔なり。

輔 周則国必強 輔 隙則国必弱

輔、周なれば

則ち国必ず強く、

輔、隙あれば

則ち国必ず弱し。

故 君之所以患軍者三

故に

君の軍に患うる所以に三あり。

そもそも將軍となる現場最高指揮官とは、
国家という車輪を増強する「添え木」です。

「添え木」が車輪に密着していると、
車輪となる国家は必ず強くなります。
「添え木」が車輪に密着せずに隙間があると、
車輪となる国家は必ず弱くなります。

そういう次第で、
最高司令官となる国家君主が、軍へ口出して、憂えられる
は三つあるのです。

不知軍之不可以進 而謂之進

軍の以て進む可から不を知ら不して、
之に進めと謂う。

不知軍之不可以退 而謂之退

軍の以て退く可から不を知ら不して、
之に退けと謂う。

是謂糜軍

是を糜軍と謂う。

軍隊が進行すべきでないを知らないで、
進めと命令するのです。

軍隊が退却すべきでないを知らないで、
退けと命令するのです。

これを「軍隊の行動を束縛する」と云います。

不知三軍之事 而同三軍之政 則軍士惑矣

さんぐん

こと

し

ず

三軍の事を知らずして

さんぐん

まつりごと

とも

三軍の政を同にすれば、

すなわ

ぐんしまど

則ち軍士惑う。

軍隊の事情も知らないのに、
軍政を將軍と一緒に行なうと、
指揮官たちは、戸惑うのです。

不知三軍之權 而同三軍之任 則軍士疑矣

三軍の権を知らずして

三軍の任を同にすれば、

則ち軍士疑う。

三軍既疑 諸侯之難至矣

三軍既に疑はば、

諸侯の難至らん。

是謂乱軍引勝

是を、軍を乱して勝を引く、と謂う。

軍隊の戦闘上の運用を知らないで、

戦闘指揮を一緒に行うと、

指揮官たちは、疑うのです。

全軍が既に疑うならば、

他国の諸侯たちが攻めてくる災難に至ります。

これを「軍を乱して勝利を失くす」というのです。

九 勝利を予知する五つの道理

故 知勝有五

故に

勝を知るに五あり。

知可而戰 与不可而戰勝 知衆寡之用者勝 上下同欲者勝

以虞待不虞者勝 将能而君不御者勝

戦う可きと、

戦う可から不を知るは勝つ。

衆寡の用を識るは勝つ。

上下の欲を同じうするは勝つ。

虞を以て不虞を待つは勝つ。

将の能にして、君の御せざるは勝つ。

此五者 知勝之道也

この五つは、勝を知るの道なり。

それゆえ、

予め勝ちを知るのに五つあります。

一・「戦うべき」と

「戦うべきでない」を知るは勝ちます。

二・兵力の多い少ないに応じた運用を識別するは勝ちます。

三・上下の意思を同じにしているは勝ちます。

四・事前に考えて、事前に考えない敵を待つは勝ちます。

五・現場指揮官が有能で、

現場に居ない最高司令官が制御しないは勝ちます。

これら五つは、勝利を予知する道理です。

故兵 知彼知己 百戦不殆

故に兵は、

彼を知りて、

己を知れば、

百戦して殆うからず。

不知彼而知己 一勝一負

彼を知らずして、

己を知れば、

一勝一負す。

不知彼不知己 每戦必殆

彼を知らずして、

己を知らずれば、

戦う毎に必ず殆うし。

したがって軍事では、

敵方の「勝利を予知する道理」を知り、

身方の「勝利を予知する道理」を知るなら、

百回戦い危険はないのです。

敵方の「勝利を予知する道理」を知らず、

身方の「勝利を予知する道理」を知るなら、

勝ったり負けたりするのです。

敵方の「勝利を予知する道理」を知らず、

身方の「勝利を予知する道理」も知らないなら、

戦うごとに必ず危険なのです。

※道理となる五つの状況を「知る／知らない」

第四篇 「勢」 位置のエネルギー

一 分数と形名

孫子曰 凡治衆 如治寡 分数是

孫子曰く。

凡そ衆を治むるに

寡を治むるが如くするは、

分数是、

闘衆 如闘寡 形名是也

衆を闘わすに

寡を闘わすが如くするは、

形名是なり。

孫先生は云います。

およそ大人数の兵士を治めるのに、

まるで少人数を治めているようにするのは、

兵士の数を分ける部隊の編成です。

大人数の兵士を戦わせるのに、

まるで少人数を戦わせているようにするのは、

命令を形にする道具、旗や鳴り物です。

二 奇正と虚実

三軍之衆 可使畢受敵而無敗 奇正是

三軍の衆、

畢く敵を受けて敗無からしむ可きは、
奇正是、

兵之所加 如以礮投卵者 虚実は也

兵の加うる所、

礮を以て卵を投じるが如くするは、
虚実はなり。

全軍の大人数の兵士、

全員が敵方を受けて敗北しないようにできるのは、
奇策と正攻法を使い分けるからです。

兵力を投入する際に、

石を投げるに、まるで卵を投げるようにするのは、
虚と実を使い分けるからです。

三 奇正はメビウス・ループ

凡戦者 以正合 以奇勝

凡そ戦いは、

正を以て合い、

奇を以て勝つ。

故 善出奇者 無窮如天地

無竭如河海

故に

善く奇を出すは、

窮まり無きは天地の如く、

竭き無きは河海の如し。

およそ戦いは、

正攻法で合い、

奇策で勝つのです。

したがって、

巧妙に奇策を出すとは、

極みがないこと、天や地のようです。

果てしないのは、黄河や海のようです。

終而復始 日月是

おわ ま はじ

終りて復た始まるは、

にちげつこれ

日月是、

死而復生 四時是也

し ま しよ

死して復た生じるは、

しじこれ

四時是なり。

終わっては回復して始まるのは、

太陽や月です。

死んで回復して生じるのは、

四季です。

声不^{こえ}過^ご五^ご 五^ご声^{せい}之^の変^{へん} 不^ふ可^か勝^{しょう}聽^{てい}也

声^{こえ}は五^ごに過^すぎ不^ぎるも、

五^ご声^{せい}の^の変^{へん}は、

勝^あげて聴^きく可^べから不^ずなり。

色不^{いろ}過^ご五^ご 五^ご色^{しき}之^の変^{へん} 不^ふ可^か勝^{しょう}觀^{くわん}也

色^{いろ}は五^ごに過^すぎ不^ぎるも、

五^ご色^{しき}の^の変^{へん}は、

勝^あげて観^みる可^べから不^ずなり。

味不^{あじ}過^ご五^ご 五^ご味^み之^の変^{へん} 不^ふ可^か勝^{しょう}嘗^{じやう}也

味^{あじ}は五^ごに過^すぎ不^ぎるも、

五^ご味^みの^の変^{へん}は、

勝^あげて嘗^なむ可^べから不^ずなり。

音^ねは「宮^{みやう}」「商^{じやう}」「角^{かく}」「徵^{ちゆう}」「羽^う」の五^ごつに過^すぎません。

五^ご音^ね階^{かい}の^の変^{へん}化^かは

殊^{しゆ}勝^{じやう}で、聞^きくに尽^つくせな^いいのです。

色^{いろ}は「青^{せい}」「赤^{せき}」「黄^{わう}」「白^{はく}」「黒^{くわく}」の五^ごつに過^すぎません。

五^ご色^{いろ}の^の変^{へん}化^かは

殊^{しゆ}勝^{じやう}で、観^{くわん}るに尽^つくせな^いいのです。

味^{あじ}は「甘^{かん}」「酸^{さん}」「辛^{しん}」「苦^く」「鹹^{しおからい}」の五^ごつに過^すぎません。

五^ご味^{あじ}の^の変^{へん}化^かは

殊^{しゆ}勝^{じやう}で、味^{あじ}わい尽^つくせな^いいのです。

戦勢不過奇正 奇正之変 不可勝窮也

戦う勢は奇正に過ぎ不るも、

奇正の変は勝げて窮む可から不なり。

奇正環相生 如環之無端

奇正の環相生じるは、

環の端無きが如し。

孰能窮之

孰か能く之を窮めん。

戦う勢いは、奇策と正攻法に過ぎないのです。

奇策と正攻法の変化は殊勝で、極め尽くせないのです。

奇策と正攻法の互いに生じる輪は、

丸い輪の端っこのないようなものです。

※ メビウス・ループ

この奇策と正攻法の互いに生じる仕組みを、だれに極められるでしょう。極められないのです。

四 勢力と節目

水之疾 至於漂石者 勢也 鷺鳥之疾 至於毀折者 節也
みず はや いた いた
水の疾くして、石を漂うに至るは、勢なり。
しちよう はや ぎせつ いた
鷺鳥の疾くして、毀折に至るは、節なり。

是故 善戦者 其勢險 其節短

是の故に

善く戦うは、

其の勢は険にして、

其の節は短なり。

勢如驥弩 節如発機

勢は弩を驥るが如く、

節は機を発するが如し。

水が迅疾して石を漂わせるのは、勢力です。

猛禽類が迅疾して獲物の骨を砕くのは、節目です。

だから、

巧妙に戦うのは、

その勢力は険しく、

その節目は短いのです。

勢力は、石弓の弦を張るようです。

節目は、石弓の仕掛けを発動するようです。

五 乱さず敗れず

紛紛紜紜 鬪乱 而不可乱

ふんぶんうんうん

紛々紜々として

たたか

闘い乱れて、

みだ

乱す可から不。

渾渾沌沌 形円而不可敗

こんこんとんとん

渾々沌々として、

かたちえん

形円にして、

やぶ

敗る可から不。

紛紛に紛紛、
紜々に紜れ、

闘い乱れて、

乱してはいけないのです。

渾りに渾り、
沌がりに沌がり、

円の形にして、

敗れてはいけないのです。

六 数と勢と形

乱生於治 怯生於勇 弱生於強

らん ち しやう
乱は治に生じ、

きやう ゆう しやう
怯は勇に生じ、

じやく きやう しやう
弱は強に生じる。

治乱数也

ちらん すう
治乱は数なり。

勇怯勢也

ゆうきやう いきおい
勇怯は勢なり。

強弱形也

きやうじやく かたち
強弱は形なり。

乱れは、治まるに生じます。

怯えは、勇ましさに生じます。

弱さは、強さから生じます。

乱れるか治まるかは、人数です。

怯えか勇ましいかは、勢力です。

弱いか強いかは、陣形です。

善動敵者 形之 敵必従之 予之 敵必取之

善く敵を動かすは、

之に形すれば

敵必ず之に従い、

之に予うれば

敵必ず之を取る。

以此動之 以詐待之

此れを以て之を動かし、

詐を以て之を待つ。

巧妙に敵方を動かすのは、

敵方に判るよう陣形にすると、

敵方は必ずその陣形に従います。

敵方に何かを与えると

敵方は必ずそれを取ります。

与えることで、敵方を動かします。

詐称により、敵方の動きを待つのです。

七 勢力に任せる

故 善戦者 求之於勢 弗責於人

故に

善く戦うは、

之を勢に求めて、

人を責め弗。

故 能択人 而任勢

故に

能く人を択て、

勢に任せる。

だから

巧妙に戦うには、

勢力を求めて、

人を責めないのです。

だから、

人を当てにしない人選ができます。

勢力に任せるのです。

任勢者 其戦人也 如転木石

いきおい まか
勢に任せるは、

その人を戦わすや、
ひと たたか

木石を転じるが如し。
ぼくせき てん ごと

木石之性 安則静 危則動 方則止 円則行

ぼくせき せい
木石の性は、

安らかなれば則ち静に、
やす すなわ しずか

危うければ則ち動き、
あや すなわ うご

方なれば則ち止まり、
ほう すなわ とど

円なれば則ち行く。
えん すなわ い

故 善戦人之勢 如転円石於千仞之山 勢也

ゆえ よ ひと たたか
故に善く人を戦わしむるの勢、
いきおい

円石を千仞の山に転じるが如きは、
えんせき せんじん やま てん ごと

勢なり。
いきおい

勢力に任せるのは、

兵士を戦わせるのに、

木や石を転落させるようです。

木や石の性質は、

安定していれば静かです。

傾斜していれば動きます。

四角形ならば止まります。

円形ならば行きます。

だから巧妙に兵士を戦わせる勢力は、

丸い石を高さの知れない山から転落させるような、

勢力です。

第五編 「形」 幾何学のエネルギー

一 勝つ理由は敵方にあり

孫子曰 昔善戦者 先為不可勝 以待敵之可勝

孫子曰く。

昔善く戦うは、

先に勝つ可から不を為して、

以て敵の勝つ可きを待つ。

不可勝在己 可勝在敵

勝つ可から不は己れに在り。

勝つ可きは敵に在り。

孫先生は云います。

昔の巧妙な戦いは、

先に敵方が身方に勝てない状況を為して、

それから敵方に勝てる状況を待機するのです。

敵方の身方に勝てない理由は、身方にあります。

身方が敵方に勝てる理由は、敵方にあります。

故 善者 能為不可勝 不能使敵可勝

故に

善きは、

勝つ可から不を為し能うも、

敵をして勝つ可から使むるに能わ不。

故曰 勝可知 而不可為也

故に曰く、

勝は知る可し、

為す可から不なり。

だから、

巧妙とは、

敵方が身方に勝てない状況にできたとしても、

敵方を崩して、身方が勝てる状況にはできないのです。

だから、云うのです。

「勝利は予知する」のです。

「勝利は作為できない」のです。

二 自らを保ち勝を全う

不可勝守也

勝かつ可べから不ずは守まもるなり。

可勝攻也

勝かつ可べきは攻せめるなり。

守則有余

守まもりは則すなわち余あまり有ある。

攻則不足

攻せむるは則すなわち足たら不ざる。

勝てない際は、守ります。

勝てる際は、攻めるのです。

守りは、つまり余りあるのです。

攻めは、つまり足りないのです。

昔 善守者 蔵九地之下 動九天之上

昔、

善く守るは

九地の下に蔵れ、

九天の上にあ動く。

故 能自保全勝也

故に

能く自ら保ちて

勝を全うするなり。

昔の話です。

巧妙に守るは、

九地の下に隠れ、

九天の上にあ動きます。

だからこそ、

身方を敵方の攻撃から保持できるから、

勝利を保全するのです。

三 勝利の後に戦闘

見勝不過衆人之所知 **非善者也**

勝ちを見事に衆人の知る所に過ぎずるは、

善なるに非ずなり。

戦勝而天下曰善 **非善者也**

戦い勝ちて天下善しと曰うは、

善なるに非ずなり。

拳秋毫^{しゆうこう}不為多力 見日月不為明目 聞雷霆不為聡耳

秋毫^{しゆうこう}を挙^あぐるは多力^{たりによく}と為さ^なず。

日月^{にちげつ}を見るは明目^{めいもく}と為さ^なず。

雷霆^{らいてい}を聞くは聡耳^{そうじ}と為さ^なず。

勝ちの読みとりには、大衆が知るまで経過しないくらいでは、善ではありません。

戦いに勝って、天下に善いと言われるくらいでは、善ではありません。

なぜなら、

細い毛を持ち上げるのでは、力持ちと為さないので。

太陽と月が見えるだけで、目が明るいとは言わないのです。

雷の稲妻が聞こえるだけで、耳が聡^{さと}いとは言わないのです。

所謂善者 勝易勝者也

所謂、
いわゆる

善いは、
よ

勝ち易きに勝つなり。
か やす

故 善者之戦 無奇勝 無智名 無勇功

故に善い戦いは、
ゆえ よ たたか

奇勝無く、智名無く、勇功無し。
きしような ちめいな ゆうこうな

故 其戦勝不貸

故に、其の戦い勝ちて貸さず。
ゆえ その たたか か ず

不貸者 其所措勝 勝敗者也

貸さざるは、
か ざ

其の勝を措く所、
そ 勝ち お ところ

敗れるに勝つなり。
やぶ か

いわゆる

巧妙は、

勝ちやすい機会に勝つのです。

だから、巧妙な戦いは、

奇策による勝利ではありません。智略により名を成したのでもありません。武勇により功績を残したのでもないのです。

そこで、戦いに勝ったに代わりはありません。

代わりないというのは、

その勝利を収めるのは、

敗れている敵方に勝つからです。

善戦者 立於不敗之地 而不失敵之敗也

善く戦うは、

不敗の地に立ち、

敵の敗を失はざるなり。

是故 勝兵先勝 而後戦 敗兵先戦 而後求勝

是の故に、

勝兵は先に勝ちて、

後に戦い、

敗兵は先に戦いて、

後に勝を求む。

巧妙に戦うのは、

不敗の場所に立ち、

敵方の敗北を失わないのです。

以上のような次第で、

勝利の軍は、先ず勝利します。

勝利の後に戦闘します。

敗北の軍は、先ず戦闘します。

戦闘の後に、勝利を求めます。

四 道を修めて法を保つ

故 善者 修道 而保法

故に

善いは、

道を修めて

法を保つ。

故 能為勝敗正

故に

能く勝敗の正を為す。

ゆえに

巧妙は、

五事の「道」を修めて、

五事の「法」を保ちます。

だから

勝敗を自由に正せるのです。

法 一日度 二日量 三日数 四日称 五日勝

法は、

一に曰く度、

二に曰く量、

三に曰く数、

四に曰く称、

五に曰く勝。

地生度 度生量 量生数 数生称 称生勝

地は度を生じ、

度は量を生じ、

量は数を生じ、

数は称を生じ、

称は勝を生じる。

五事の「法」です。

一つには「度」です。定規で測るのです。

二つには「量」です。升目で量るのです。

三つには「数」です。数字で計るのです。

四つには「称」です。比較で図るのです。

五つには「勝」です。勝敗で諮るのです。

戦場の「地」は、地形の「度」を生じます。

地形の「度」は、物資の「量」を生じます。

物資の「量」は、兵数の「数」を生じます。

兵数の「数」は、兵力の「称」を生じます。

兵力の「称」は、勝敗の「勝」を生じます。

勝兵若 以鎰称銖 敗兵若以銖称鎰

勝兵は

鎰を以て、銖を称るが若し。

敗兵は

銖を以て、鎰を称るが若し。

称勝者戦民也

勝を称るは民を戦はすなり。

如決積水於千仞之罅 形也

積水を

千仞の罅に決するが如きは、

形なり。

勝利の軍は、

重いおもりを持って、軽いおもりと比較しているようです。

敗北の軍は、

軽いおもりを持って、重いおもりと比較しているようです。

「勝」の比較が、庶民を戦わせます。

満積の水を、

底知れないヒビ割れた透き間へ流し込むような、

形です。

※ ヒビ割れに落ちた円木を浮かばせるイメージ

第六篇 「九変」 指揮官の教養

一 兵士の統率

孫子曰 凡用兵之法 将受命於君 合軍聚集

孫子曰く。

凡そ兵を用うる法は、

将、命を君に受け、

軍を合わせ衆を聚む。

孫先生は云います。

およそ軍を運用する方法です。

将軍が君主の出撃命令を受けてから、

軍を編成し兵士を統率します。

泛地無舎 餌兵勿食

泛地には舍る無く、
餌兵には食らう勿れ。

衢地交合 鋭卒勿攻

衢地には交わり合ひ、
鋭卒は攻むる勿れ。

圉地則謀 窮寇勿迫

圉地には則ち謀り、
窮寇にて迫る勿れ。

絶地勿留 死地則戦

絶地に留まる勿れ、
死地には則ち戦う。

「泛地」では宿泊しません。

泛地へ誘う誘導部隊に食いついては、ならないのです。

「衢地」では、諸侯と親交を結びます。

衢地に配備される精鋭部隊を攻めては、ならないのです。

「圉地」では、計略します。

苦しい圉地で迫るのは、ならないのです。

敵方の領土である「絶地」に留まるは、ならないのです。

行き場のない「死地」では戦うのみです。

三 五変

塗有所不由

みちよよらなる所有り。

軍有所不撃

ぐんう撃たなる所有り。

城有所不攻

しろせ攻めなる所有り。

地有所不争

ちあらそ争わなる所有り。

君命有所不受

くんめいう受けなる所有り。

※ 「五火の変」に呼応しています。

道には、經由してはならない道があります。

敵方には、攻撃してはならない敵方があります。

城には、攻略してはならない城があります。

地域には、争奪してはならない地域があります。

最高司令官の命令には、

現場指揮官として受諾してはならない命令があります。

四 九変の利と害

故將 通於九変之利者 知用兵矣

故に將、

九変の利に通じるは、

兵を用うるを知る。

將不通於九変之利者 雖知地形 不能得地之利矣

將の九変の利に通ぜざるは、

地形を知ると雖も、

地の利を得る能わ不。

治兵不知九変之術 雖知五利 不能得人之用矣

兵を治めて九変の術を知らざるは、

五つの利を知ると雖も、

人の用を得る能わ不。

だから指揮官は、

九変の利益に通じて、

軍の運用を知るのです。

指揮官でありながら、九変の利益に通じないのは、

地形を知っているといえども、

地域の利益を得るはできないのです。

軍を治めて、九変の技術を知らないのでは、

九変のうち五つの利益を知るといえども、

兵士の運用を得られないのです。

※ 過半数の五という意味です。特定の五つではない。

五 利害に雑じる

是故 智者之慮 必雑於利害

是の故に、

智者の慮は

必ず利害に雑う。

雑於利故務可信也 雑於害故憂患可解也

利を雑える故に、

務むれば信じる可し。

害に雑える故に、

憂患うれば解く可し。

こうしたわけで、

智者の思慮は、

必ず利と害が混じります。

利に混ぜるから、

務めるなら信じられるのです。

害に混ぜるから、

心配するなら解けるのです。

六 諸侯の変

是故 屈諸侯者以害

是の故に、

諸侯を屈するは害を以てす。

役諸侯者以業

諸侯を役するは業を以てす。

趨諸侯者以利

諸侯を趨らすは利を以てす。

そうした次第で、

諸侯を屈服させるには、損害を強調します。

諸侯を使役させるには、事業を仕向けます。

諸侯を奔走させるには、利益を強調します。

故 用兵之法

ゆえ へい もち ほう
故に兵を用うる法は、

無待其不来 恃吾有 以待也

そ き ざ たの な
其の来たらざるを恃む無く、

われ たの あ
吾に恃む有りを

もつ ま
以て待つなり。

無待其不攻 恃吾有所 不可攻也

そ せ ざ たの な
其の攻めざるを恃む無く、

われ たの ところ
吾に恃むある所を

せ べ ず
攻める可から不なり。

そこで、軍を運用する方法です。

敵方の来ないを頼りにするのではなく、

身方の備えを頼りにして、

敵方を待つのです。

敵方が攻撃してこないを頼りにするのではなく、

身方へ攻撃させない備えを頼りに、

敵方は攻めるべきではないのです。

七 五危

故 将有五危

故に将に五危あり。

必死可殺 必生可虜 忿速可悔 廉潔可辱 愛民可煩

必死は殺す可し。

必生は虜とす可し。

忿速は侮る可し。

廉潔は辱しむ可し。

愛民は煩わす可し。

そして、現場指揮官には五つの危険があります。

「必ず死ぬ」は、殺されます。

「必ず生きる」は、捕虜にされます。

「短気即断」は、侮られます。

「清廉潔白」は、辱められます。

「人情深い」は、煩わされます。

※ 「五事」の「将」となる「智」「信」「仁」「勇」「嚴」に呼応しています。

凡此五者 将之過也 用兵之災也

凡そ此の五つは

将の過なり。

兵を用うる災なり。

覆軍殺将 必以五危

軍を覆し将を殺すは、

必ず五危を以てす。

不可不察也

察せざる可から不なり。

およそこの五つは、

指揮官の過失です。

軍を運用する災いです。

軍が覆滅され、指揮官が殺されるのは、

必ずこれら五危のどれかです。

推察しないわけにはいかないのです。

第七篇 「軍争」 先着を争う勢

一 軍争は困難

孫子曰 凡用兵之法 将受命於君 合軍聚衆 交和而舍 莫難於軍争

孫子曰く。

凡そ兵を用うる法は、

将、命を君に受け、

軍を合わせ衆を聚め、

和を交えて舍まるに、

軍争より難きは莫し。

孫先生は云います。

およそ軍を運用する方法です。

将軍が君主の出撃命令を受けてから、

軍を編成し大人数を統率して、

敵方と対陣するまでの過程で、

戦場への軍の先着を争う「軍争」ほど困難はないのです。

二 迂直の道

軍争之難者 以迂為直 以患為利

軍争の難きは、

迂を以て直と為し、
患を以て利と為す。

故 迂其途 而誘之以利 後人発 先人至者

故に其の途を迂にして

之を誘うに利を以てし、

人に後れて発し、

人に先んじて至るは、

知迂直之計者也

迂直の計を知るなり。

軍争の難しさは、

迂回路を直進の近道として、

憂いごとを利益にするところです。

だから、戦地に遠い迂回路を取りながら、

敵方を誘い出すのに利益をつかい、

敵方よりも後に出発しながら、

敵方よりも先に戦場に到着するのです。

これは「迂直の計」を知ることによって達成します。

三 軍争の利

軍争為利 軍争為危

ぐんそう り ため

軍争は利の為にせば、

ぐんそう きた

軍争は危為り。

拳軍而争利 則不及

ぐん あ り

軍を挙げて利を争えば

すなわ およ ず

則ち及ば不。

委軍而争利 則輜重捐

ぐん す り

軍を委てて利を争えば

すなわ しちようす

則ち輜重捐てらる。

軍争が有利のためならば、

その軍争はかえって危険です。

もし全軍をあげて戦場に先着する有利を争えば、
先に戦場に到着できないのです。

全軍にかまわずに先着の有利を得ようと争えば、
補給物資の部隊は後方に捨て去られてしまいます。

是故 卷甲而趨利 日夜不処 倍道兼行 百里而争利 則擒三將軍

是の故に、

甲を巻きて利に趨り、

日夜処ら不、

道を倍して兼行し、

百里にして利を争えば、

則ち三將軍を擒にす。

勁者先 罷者後 則十一以至

勁きは先んじ、

罷れるは後れ、

則ち十にして一を以って至る。

こうした次第で、

鎧兜を脱いで背負って有利に走り、

昼夜休まずに、

移動距離を倍にして強行し、

百里彼方に有利を争えば、

すべての現場最高指揮官は捕虜にされてしまいます。

強健な兵士は先になり、

罷弊した兵士は遅れ、

あげくのはて、十人に一人が到着します。

五十里而争利 則蹶上将 法以半至

五十里にして利を争えば、

則ち上将を蹶す。

其の法半ば至る。

三十里而争利 則三分之二至

三十里にして利を争えば、

則ち三分の二に至る。

是故 軍無輜重則亡 無糧食則亡 無委積則亡

是の故に

軍に輜重無ければ則ち亡び、

糧食無ければ則ち亡び、

委積無ければ則ち亡ぶ。

五十里彼方に有利を争えば、

先鋒の上役指揮官を敗死させて、

その方法では、半分が到着します。

三十里彼方に有利を争えば、

三分の二が到着します。

このように、

軍に補給物資の部隊が無ければ、亡びます。

兵糧が無ければ、亡びます。

財貨の蓄えが無ければ、亡ぶのです。

四 諸侯の謀

是故 不知諸侯之謀者 不能予交

是の故に

諸侯の謀を知らなければ、
予め交わる能わ不。

不知山林 險阻 沮沢之形者 不能行軍

山林、險阻、沮沢の形を知らなければ、
軍を行る能わ不。

不用郷導者 不能得地利

郷導を用いなければ、
地の利を得る能わ不。

そこで、

他国の諸侯たちの謀を知らなければ、
あらかじめ外交するは、できないのです。

山林、険しい地形、沼沢地などの地形を知らないのでは、
軍隊を進めるは、できないのです。

その土地の案内役を用いられないのでは、
地形の利益を得るは、できないのです。

五 軍争の法は風林火山

故 兵以詐立 以利動 以分合變者也

故に、兵は詐を以て立ち、

利を以て動き、分合を以て変なり。

故 其疾如風 其徐如林 侵掠如火 不動如山

故に

其の疾きは風の如く、

其の徐なるは林の如く、

侵掠するは火の如く、

動か不るは山の如く、

難知如陰 動如雷震

知り難きは陰の如く、

動くは雷震の如く。

そこで、軍事は敵方の詐称から始めて、有利にて行動し分散と集合にて、変化するのです。

だから、

疾風のように進撃し、

林のように静かに待機し、

火が燃え広がるように侵攻し、

山のように居座り、

陰影のように軍隊を隠し、

雷鳴のように突然動きだすのです。

指郷分衆 廓地分利 懸権而動

郷を指して衆を分ち、

地を廓めて利を分ち、

権を懸けて動く。

先知迂直之道者勝

先に迂直の道を知るは勝つ。

軍争之法也

軍争の法なり。

郷土を目指して大人数を分けて、

地を広めて有利を分けて、

権謀に懸けて動きます。

先に「迂直の道」を知ると勝ちます。

これこそ軍争の方法なのです。

六 目と耳の統一

是故 軍政曰 言不相聞 故 為鼓金 視不相見 故 為旌旗

是の故に、軍政に曰く、

言うに相聞え不、

故に鼓金を為る。

視すに相見え不、

故に旌旗を為る。

是故 昼戦多旌旗 夜戦多鼓金 鼓金旌旗者 所以一民之耳目也

是の故に、

昼戦に旌旗を多く、

夜戦に鼓金を多くす。

鼓金、旌旗なるは

民の耳目を一つにする所以なり。

このため、古い兵法書には、

「口で言うのでは、お互いに聞こえない。」

「だから、太鼓や鐘、鼓金を備える。」

「指し示したのでは、お互いに見えない。」

「だから、旗やのぼり、旌旗を備える。」

と記されます。

こういう次第にて、

昼の戦いには、旗やのぼりとなる旌旗を多くします。

夜の戦いには、太鼓や鐘となる鼓金を多くします。

鼓金と旌旗を使う理由は、

庶民兵の耳と目を一つにするためです。

民既己搏一 則勇者不得独進 怯者不得独退

たみすで

おのれ

ひと

あつ

民既に己と一つに搏まれば、

すなわ

ゆう

ひと

すす

えず

則ち勇は独り進むを得不、

きよう

ひと

しりぞ

えず

怯は独り退くを得不。

此用衆之法也

此れ衆を用うるの法なり。

庶民兵が既に己と一つに集中しているなら、

勇ましい兵士が独りで進むはできず、

怯える兵士が独りで退くもできないのです。

これは、大人数の兵を運用する方法です。

七 気・心・力・変の治

故 三軍可奪氣 將軍可奪心

故に

三軍には氣を奪う可く、
將軍には心を奪う可し。

故 朝氣銳 晝氣惰 暮氣歸

故に朝の氣は鋭く、

晝の氣は惰り、

暮れの氣は歸る。

故 善用兵者 避其銳氣 擊其惰歸

故に善く兵を用うるは、

其の銳氣を避け、其の惰歸を撃つ。

此治氣者也

此れ氣を治むるなり。

こうして、

全軍の氣を奪うようにします。

將軍の心を奪うようにします。

こういう次第で、朝の氣は鋭いのです。

晝の氣は怠惰なのです。

夕暮れの氣は尽きるのです。

したがって、巧妙に軍を運用するなら、

朝の銳氣を避けて、晝夕の怠惰で尽きる氣を撃破します。

こうして氣を治めるのです。

以治待乱 以静待譁

治を以て乱を待ち、
静を以て譁を待つ。

此治心者也

此れ心を治むるなり。

治まりにて、混乱を待ちます。

静かにて、誼譁を待ちます。

こうして、心を治めるのです。

以近待遠 以佚待勞 以飽待飢

近ちかきを以もつて遠とおきを待まち、

佚いつを以もつて勞ろうを待まち、

飽ほうを以もつて飢きを待まち。

此治力者也

此これ力ちからを治おさむるなり。

近くにて、遠きを待ちます。

安佚あんいつにて、疲勞を待ちます。

飽満にて、飢餓を待ちます。

こうして、力を治めるのです。

無要正正之旗 無擊堂堂之陣

せいせい はた むか な
正々の旗を要うる無く、
どうどう じん な
堂々の陣を撃つは無い。

此治変者也

こ へん おさ
此れ変を治むるなり。

よく整う旗に立ち向かいません。
堂々とする陣立てに攻撃しません。

こうして変化を治めるのです。

八 四つを治める注意事項

故 用兵之法

ゆえ へい もち ほう
故に、兵を用うる法、

高陵勿向

こうりょう
高陵には向う勿れ。

倍丘勿迎

きゆう そむ むか なか
丘に倍くに迎える勿れ。

佯北勿従

いつわ に したが なか
佯り北ぐるには従う勿れ。

そして、軍隊を用いる方法です。

高い丘に向かい攻めては、ならないのです。

※ 「治気」に呼応する。「倍丘」に同じ。

丘を背にする攻めを迎撃しては、ならないのです。

※ 倍の兵力差まで。「治気」に呼応する。

偽りの退却を追いかけては、ならないのです。

※ 「治心」に呼応する。

囲師遺闕

師を囲むには闕を遺せ。

歸師勿遏

歸師は遏むる勿れ、

此用衆之法也

此れ、衆を用うる法なり。

包囲した軍には、逃げ道を残します。

※ 「治力」に呼応する。

歸ろうとしている軍を引き留めては、ならないのです。

※ 「治変」に呼応する。

これは大人数の兵士を運用する方法です。

第八篇 「実虚」 無形の形

一 主導権を握る

孫子曰 凡先処戦地 而待戦者佚 後処戦地 而趨戦者勞

孫子曰く。

凡そ先に戦地に処りて

戦いを待つは佚し、

後れて戦地に処りて

戦いに趨くは勞す。

故 善戦者 致人而不致於人

故に善く戦うは、

人を致して

人に致されず。

孫先生は云います。

およそ先に戦地に到着して

戦いを待つのは安佚です。

遅れて戦地に到着して

急いで戦うのは苦勞します。

したがって巧妙に戦うには、

敵方を想うがままに馴致して、

敵方に馴致されないのです。

※ 「馴致」は馴染ませて至らす意味

能使敵自至者 利之也

能く敵よを使てきして自しら至みずからすは
之これを利りすればなり。

能使敵不得至者 害之也

能く敵よを使てきして至しるを得いた不得えずは
之これを害がいすればなり。

故 敵佚 能勞之 飽 能饑之者 出於其所必趨也

故ゆえに、敵佚てきいつすれば

能く之よを勞これし、

飽あけば

能く之よを饑これえしめ、

其その必かならず趨おもむく所ところに出いずればなり。

敵方を自発的に仕向けられるのは、
敵方を利益で誘うからです。

敵方を行動できないように仕向けられるのは、
敵方を妨害するからです。

したがって

敵方が安佚あんいつであれば、

敵方を苦勞させるが、できます。

敵方の食糧が十分であれば、

敵方を飢えさせるが、できます。

敵方が必ず急いで出てくる所に攻撃するからです。

二 敵の命を司る

故 行千里而不畏 行無人之地也

故に、

千里を行きて畏れ不るは、
無人の地を行けばなり。

攻而必取 攻其所不守也

攻めて必ず取るは、
其の守らざる所を攻むればなり。

守而必固 守其所不攻也

守りて必ず固きは、
其の攻めざる所を守ればなり。

したが、

千里の遠征で危険がないのは、
敵方のいない地域を進むからです。

攻撃して必ず取るのは、

敵方が守らない場所を攻めるからです。

守れば必ず堅固なのは、

敵方が攻めない場所を守るからです。

故 善攻者 敵不知所守

故に善く攻むるは、

敵、守る所を知らず。

善守者 敵不知所攻

善く守るは、

敵、攻むる所を知らず。

微乎微乎 至於無形 神乎神乎 至於無聲

微なるかな微なるかな、

無形に至る。

神なるかな神なるかな、

無聲に至る。

故 能為敵司命

故に能く敵の司命を為す。

したがって、巧妙に攻めるは、

敵方は守る場所を知らないのです。

巧妙に守るは、

敵方は攻める場所を知らないのです。

微妙に微妙に、

無形にまで到達します。

神妙に神妙に、

無聲にまで到達します。

だからこそ、敵方の命を司ることができるのです。

三 進退も攻守も適う

進不可迎者 衝其虚也

進みて迎え可からずは、

其の虚を衝けばなり。

退不可止者 遠不可及也

退きて止む可からずは、

遠く及ぶ可からずなり。

身方が進撃して、敵方が迎撃できないのは、
守備の不十分な所、虚を衝くからです。

身方が退却して、敵方が阻止できないのは、
その退却路が遠すぎて追撃できないからです。

故 我欲戦 敵雖高塁深溝 敵不得不与我戦者 攻其所必救也

故に、我戦わんと欲すれば、

敵、塁を高くし溝を深くすと雖も、

敵、我と戦わざるを得ざるは、

其の必ず救う所を攻むればなり。

我不欲戦 画地而守之 敵不得与我戦者 膠其所之也

我戦いを欲せ不れば、

地を画して之を守るも、

敵、我と戦うを得ざるは、

其の之く所に膠ればなり。

そこで、身方が戦いを望むなら、

敵方が砦の壁を高くして、堀を深く掘ったとしても、

敵方が身方と戦わない選択が得られないのは、

敵方が絶対に救援する場所を攻撃するからです。

身方が戦いを望まないなら、

地面に印をつけて守るだけで、

敵方が身方と戦う選択を得られないのは、

敵方が進む場所を間違えるからです。

四 無形で集まる

故 善將者 形人而無形 則我搏而敵分

故に善い將は、人に形して無形なれば、

則ち我は搏まりて敵は分る。

我搏而為一 敵分而為十 是以十擊一也

我は搏まりて一と為り、

敵は分れて十と為らば、

是十を以て一を攻むるなり。

我寡而敵衆 能以寡擊衆者 則吾所与戰者約矣

我は寡にして敵は衆なり。

能く寡を以て衆を撃つは、

則ち吾が与に戦う所は約なり。

そこで、敵方に陣形を作らせて、身方が無形ならば、
身方は集中して、敵方は分散します。

身方は集中して一つとなり、
敵方は分散して十になるなら、
これは十倍の兵力で攻めるのです。

身方は少人数で、敵方は大人数です。
少人数にて大人数を撃破できるのは、
身方が共に戦う場所へ集約するからです。

所与戦之地不可知 則敵之所備者多

たたか

ところ

ち

し

べ

ず

戦う所の地は知る可から不、

すなわ

とき

そな

ところ

おお

則ち敵の備うる所の多し。

所備者多 則所戦者寡矣

そな

ところ

おお

備うる所が多ければ、

すなわ

たたか

ところ

すくな

則ち戦う所は寡なし。

戦う場所を、敵方は予知できないので、
敵方の備える場所は多くなります。

備える場所が多ければ、
戦う場所は少人数です。

備前者後寡 備後者前寡

前まえに備そなうれば後うしろ寡すくなく、
後うしろに備そなうれば前まえ寡すくなく、

備左者右寡

左ひだりに備そなうれば右みぎ寡すくなく、

無不備者無不寡

備そなえ不ざるは寡すくなから不ざる無なし。

寡者備人者也 衆者使人備己者也

寡すくなきは人ひとに備そなうるなり。

衆おおきは人ひとに、

己おのれに備そなえ使しむるなり。

だから、前方に備えると、後方は少人数です。

後方に備えると、前方は少人数です。

左側に備えると、右側は少人数です。

※ 右側に備える記載なし。余白がない。

備えないなら、少人数でないのです。

少人数になるのは、敵方に備えているからです。

大人数になるのは敵方に、

身方を備えさせているからです。

知戦之日 知戦之地 千里而戦

戦いの日を知り、

戦いの地を知れば、

千里にして戦う。

不知戦之日 不知戦之地

戦いの日を知らず、

戦いの地を知らなければ、

前不能救後 後不能救前 左不能救右 右不能救左

前は後を救うに能わ不。

後は前を救うに能わ不。

左は右を救うに能わ不。

右は左を救うに能わ不。

戦いの日付を知り、

戦いの地域を知れば、

千里の遠征であっても戦えます。

戦いの日付を知らず、

戦いの地域を知らないなら、

前衛は後衛を救援できないのです。

後衛は前衛を救援できないのです。

左翼は右翼を救援できないのです。

右翼は左翼を救援できないのです。

況遠者数十里 近者数里乎

いわん とお すうじゆうり
況や遠きは数十里、

ちか すうり
近きは数里なるや。

以吾度之 越人之兵雖多 亦奚益於勝哉

われ もつ これ はか
吾を以て之を度るに、

えつじん へい おお いえど
越人の兵は多しと雖も、

またなん ちか えき
亦奚ぞ勝に益あらん。

故曰 勝可擅也

ゆえ いわ
故に曰く、

ちか ほしいまま べ
勝は擅とす可きなり。

敵雖衆可無闘

てき おお いえど
敵は衆しと雖も、

たたか な べ
闘い無しとす可し。

ましてや、遠くて数十里なのです。
近くて数里なのです。

内なる私にて戦争を予測します。
越国の兵が多いといえども、
何ら勝利の役に立ちません。

こうした次第にて、
勝利は思いのままと申し上げたのです。

敵方が大人数といえども、
闘えないようにできるのです。

五 情報を集めて計算

故 ゆえ 續之 つづ 而知動靜之理 形之而知死生之地

故に、

之れを續めて、

動靜の理を知る。

之を形して、

死生の地を知る。

計之而知得失之日 角之而知有余不足之処

之を計りて、

得失の日を知る。

之を角りて、

有余不足の処を知る。

そこで、

敵方の情報を集めて、

行動と静止の理由を知ります。

敵方に形を作らせて、

死する地域と生きる地域を知ります。

敵方の情報を計算して、

得る日付と失う日付を知ります。

敵方との差異を試して、

余り有ると足りないを知るのです。

六 無形に至り無窮に應じる

形兵之極 至於無形 無形 則深間弗能窺也 智者弗能謀也

兵を形するの極は、

無形に至る。

無形なれば、

則ち深間も窺うに能弗ずなり。

智は謀るに能弗ずなり。

軍隊の陣形の極致は、

無形に至るのです。

無形であれば、

深く潜り込んだ間諜であつてもうかがい知れず、

智恵をもってしても、諜報できないのです。

因形而錯勝 衆不能知

かたち よ
形に因りて勝を錯くも、

しゆう し
衆は知るに能わ不。

人皆知我所以勝之形 而莫知吾所以制勝之形

ひとみなわが か
人皆我が勝つ所以の形を知りて、

われ 勝ち せい
吾が勝を制する所以の形を知るに莫し。

故 其戦勝 不復 而応形於無窮

ゆえ
故に

そ たたか
其の戦い勝つに

ふたたび
復びせ不して、

かたち むきゆう
形を無窮に応じる。

形の因果から勝利を得るのです。しかし、
大多数の人々は知ることができません。

人々は皆「身方の勝つ理由となる形」を知るので、
内なる私が「勝ちを決める理由となった形」を知るのでは
ないのです。

だから、
その戦い勝つありさまに、
ふたたび繰り返すはありません。
敵方の形に、無限に応じるのです。

七 軍の形は水を象る

兵形象水

兵の形は水に象る。

水行 避高而趨下 兵勝 避実而撃虚

水の行は高きを避けて、下きに趨く。

兵の勝は

実を避けて、

虚を撃つ。

故 水因地 而制行 兵因敵而制勝

故に

水は地に因りて、

行を制し、

兵は敵に因りて、

勝を制す。

そもそも、

軍の形は、水のようなものです。

水に行くは、高きを避けて、下へ向きます。

軍の勝利は、

敵方本体となる実相を避けて、

備えの薄い虚相を攻撃します。

したがって、

水は地形に因果して、

行き先を決めます。

軍は敵方に因果して、

勝利を決めるのです。

八 神妙で重要

兵無成勢 無恒形

へい な いきおいな
兵に成す勢無く、

つね かたちな
恒に形無し。

能与敵化 之謂神

よ てき したが
能く敵に与いて化するは、

これ しん い
之を神と謂う。

五行無恒勝 四時無常位 日有短長 月有死生

之謂神要

ごぎよう つね かちな
五行に恒に勝無く、

しじ つね くらいな
四時に常に位無し。

ひ たんちよう
日に短長あり、

つき しせい
月に死生あり。

これ しんよう
之を神要と謂う。

軍に勢力の定まるはありません。

恒に形は定まらないのです。

敵方に従って変化できるのは、

「神妙」と云います。

五行には相生相克があります。恒に勝ち定まりません。

四季においても、常に位置の定まるはありません。

日に短い長いがあります。

月に新月と満月があります。

神妙で重要なのです。

第九篇 「行軍」 軍營の環境

一 四軍の利

孫子曰 凡処軍 相敵

孫子曰く。

凡そ軍を処き敵に相する。

絶山依谷 視生処高 戦降無登

山を絶れば谷に依り、

生を視て高きに処り、

戦うには降りて登る無かれ。

此処山之軍也

此れ山に処るの軍なり。

孫先生は云います。

およそ軍隊を配置し、敵方と相対します。

山を越えるには谷に寄り進みます。

生きるに支障がない高さにいます。

戦うには降り、登ってはいけません。

これが山にいる軍隊です。

絶水必遠水

水を絶れば必ず水よりに遠ざかる。

客絶水而来 勿迎之於水内 令半济而撃之 利

客、水を絶りて来らば、

之を水の内に迎うる勿れ。

半ば济ら令めて之を撃つは利。

欲戦者 無附於水而迎客

戦わんと欲すれば、

水に附きて客を迎うる勿れ。

視生処高 無迎水流 此処水上之軍也

生を視て高きに処り、

水流を迎うる無かれ、

此れ水上に処るの軍なり。

川を渡ったら、必ず川から遠ざかります。

敵方が川を渡って来たら、

敵方が川の内にいる間に迎撃してはいけません。

敵方の半数を渡らせてから攻撃すると有利です。

戦おうとするのなら、

川岸で敵方を迎撃してはいけません。

生きるに支障がない高さにいます。

下流にいることのないようにします。

これが河川の付近にいる軍隊です。

絶斥沢 惟亟去無留

せきたく わた
斥沢を絶れば、

ただすみやか
惟亟 かに去りて留まる無かれ。

若交軍斥沢之中 依水草而背衆樹

も ぐん せきたく なか まじ
若し軍を斥沢の中に交うれば、

みずくさ よ しゅうじゆ うしろ
水草に依りて衆樹を背にす。

此処斥沢之軍也

こ せきたく お ぐん
此れ斥沢に処るの軍なり。

沼地を渡るのなら、

速やかに通り去り、留まらないのです。

もし沼地の中で敵方と戦うのなら、

水草に寄って、多くの樹木を背にします。

これが沼地にいる軍隊です。

平陸処易 而右背高 前死後生

へいりく やす
平陸には易きに処りて、

たか みぎ うしろ
高きを右の背にし、

し まえ せい うしろ
死を前にして生を後にす。

此処陸之軍也

こ りく お
此れ陸に処るの軍なり。

凡四軍之利 黄帝之所以勝四帝也

およ しぐん り
凡そ四軍の利は、

こうてい してい か ゆえん
黄帝の四帝に勝ちし所以なり。

平地では、容易な場所において、

丘陵を右後方におきます。

前方に死線を引き、後方を生命線とします。

これが平地にいる軍隊です。

おおよそ、これら四つの地域にいる軍の有利は、
黄帝が四人の帝王に打ち勝った理由なのです。

二 地形の援助

凡軍好高而惡下 貴陽而賤陰 養生而処実 軍無百疾

凡そ軍は

高きを好みて下きを惡み、

陽を貴びて陰を賤しむ。

生を養いて実に処り、

軍に百疾無い。

およそ、軍隊は、

高地を好んで低地は悪いのです。

日当たりを貴び、陰影は賤しむのです。

生命を養い、自然に囲まれているのです。

軍隊に多種多様の疾病がないのです。

陵丘隄防 処其陽 而右倍之

りようきゆうていぼう

陵丘隄防には、

其の陽に処りて、

之を右の倍くにす。

此兵之利 地之助也

此れ兵の利、

地の助けなり。

上雨水 水流至 止涉 待其定

上に雨水ありて、

水の流れ至らば、

渉るを止めて、

其の定まるを待つ。

丘陵や堤防では、

必ず陽当たりにあります。

陽当たりが右後方にします。

これが軍隊の有利です。

地形の援助です。

上に雨水があります。

水の流れが至るのなら、

わたるのを止めて、

水の流れが定まるのを待ちます。

三 避ける場所

凡地有絶澗 天井 天牢 天羅 天陷 天隙 必亟去之 勿近也

凡そ地に

絶澗、

天井、

天牢、

天羅、

天陷、

天隙、

有らば、

必ず亟かに之を去りて

近づく勿れ。

およそ地形に

絶壁の谷間となる「絶澗」、

自然の井戸となる「天井」、

自然の牢獄となる「天牢」、

自然の取り網となる「天羅」、

自然の陥し穴となる「天陷」、

自然の隙間となる「天隙」

があります。

これらからは、必ず速やかに立ち去ります。

近づいてはならないのです。

吾遠之 敵近之

われ これ 吾は之に遠ざかり、
とお

てき これ 敵は之に近づかしめよ。
ちか

吾迎之 敵背之

われ これ 吾は之を迎え、
むか

てき これ 敵は之を背にせしめよ。
うしろ

身方は、これらの地形から遠ざかります。

敵方には、これらの地形へ近づくように仕向けます。

身方は、これらの地形へ迎え撃ち、

敵方には、これらの地形を背後となるように仕向けるので
す。

四 伏兵の居る場所

軍行有 險阻 潢井 葭葦 小林 藟薈 可伏匿者 謹復索之
軍行に

險阻、

潢井、

葭葦、

小林、

藟薈

伏匿す可きは、

謹んで之を復り索める。

姦之所処也

姦の処る所なり。

軍營の近くに、

險しく狭い道となる「險阻」

深い水たまりとなる「潢井」

水辺に生える葦の原となる「葭葦」

小さい林となる「小林」

草木の繁る「藟薈」

のように潜み隠れられる場所があるのなら、

慎重に繰り返し搜索します。

伏兵のいる場所です。

五 敵との距離

敵近而静者 恃其險也

てきちか

敵近くして静しずかなるは、

其その險けんを恃たのむなり。

敵遠而挑戰者 欲人之進者

てきとお

敵遠くして戦たたかいを挑いどむは

人ひとの進すすむを欲ほつする。

其所居者易 利也

其その居おる所ところは易やすき、

利りなり。

敵方が近くにいて静かなのは、

地形の険しさを頼りにしているからです。

敵方が遠くに離れていて戦いを挑むのは、
身方の進撃を願うからです。

敵方のいる場所が容易なので、
有利だからです。

六 環境の観察

衆樹動者 来也

衆樹しゅうじゆの動うごくは

来きたるなり。

衆草多障者 疑也

衆草しゅうそうの障さわり多おおきは

疑ぎなり。

鳥起者 伏也

鳥とりの起たつは

伏ふくなり。

獸駭者 覆也

獸けものの駭おどろくは

覆ふくなり。

多数の樹木が動くのは、
敵方が来るのです。

多数の草の結び多いは、
伏兵を疑わせているのです。

鳥が飛び立つのは、
伏兵です。

獣が驚くのは、
奇襲です。

塵高而銳者 車来也

ちりたか

塵高くして銳きは

すんど

車の来るなり。

くるま

きた

卑而広者 徒来也

ひく

卑くして広きは

ひろ

徒の来るなり。

と

きた

散而条達者 樵採也

さん

散じて条達するは

じょうたつ

樵採なり。

そうさい

少而往来者 営軍者也

すくな

少くして往来するは

おうらい

軍を営むなり。

ぐん

いとな

砂塵が高く舞い上がり鋭いのは、
戦車が来るのです。

砂塵が低くて広がるのは、
歩兵が来るのです。

砂塵が分散して、細長い線を引くのは、
薪を集めているのです。

砂塵の量が少なくて往来するのは、
軍営しているのです。

七 行動の考察

辞尊而備益者 進也

辞じの卑ひくくして備えそなを益ますは

進むすすなり。

辞強而進驅者 退也

辞じの強つよくして進驅しんくするは

退しりぞくなり。

軽車先出居側者 陳也

軽車けいしやの先さきに出いでて

側かたわらに居おるは

陳ちんするなり。

使者がへりくだり、備えが増すのは、

進軍です。

使者が強硬で、部隊が侵攻してくるのは、

退却です。

隊列から軽戦車が先に抜け出して、

両側に居るのは、

行軍の形を解いて陣立てをしているのです。

無約而請和者 謀也

やくな 約無くして和を請うは

はか 謀るなり。

奔走陳兵者 期也

ほんそう 奔走して兵を陳ぬるは

き 期するなり。

半進者 誘也

なか 半ば進みは

いざな 誘うなり。

約束なしに講和を請うのは、

陰謀です。

伝令が奔走して、部隊を整列させているのは、
開戦です。

部隊が、半ば進み半ば退くのは、
誘い出そうとしているのです。

八 軍營から推察

杖而立者 飢也

杖つえつきて立たつは、

飢ううるなり。

汲役先飲者 渴也

汲くみ役やくの先さきに飲のむは

渴かわけるなり。

見利而不進者 勞倦也

利りを見みて進すすま不ざるは

勞倦ろうけんなり。

鳥集者 虚也

鳥とりの集あつまるは、

虚むなしきなり。

兵士が杖をついて立っているのは、
飢えているからです。

水くみ役が、先に水を飲むのは、
飲料に困っているからです。

利益を認めながら進撃しないのは、
疲労しているからです。

鳥が集まっているのは、
そこに人がいないからです。

夜呼者 恐也

夜の呼ぶは

恐れるなり。

軍擾者 将不重也

軍の擾れるは、

将の重から不るなり。

旌旗動者 乱也

旌旗の動くは、

乱れるなり。

吏怒者 倦也

吏の怒るは、

倦めるなり。

夜に呼ぶのは、

恐れているからです。

軍營の騒がしいのは、

指揮官に威厳がないからです。

のぼりや旗が動揺するのは、

乱れているからです。

役人が怒っているのは、

疲れているからです。

九 指揮命令から推察

粟馬肉食 軍無懸顧者 不返其舍者 窮寇也

馬に粟し肉食し、

軍に甌を懸くる無く、

其の舎に返らざるは

窮寇なり。

諄諄間間 徐言人者 失其衆者也

諄々間々として

徐に人と言うは

其の衆を失うなり。

数賞者 窘也 数罰者 困也

数賞するは窘しめるなり。

数罰するは困しめるなり。

馬に兵糧を食べさせ、兵士が肉食し、

軍営に鍋や釜の懸ける様子なく、

その幕舎に帰ろうとしないのは、

敵方は追い詰められて困窮しているのです。

懇切丁寧に何度も繰り返し、

ゆっくり静かに会話しているのは、

大多数の信頼を失っているからです。

頻繁に賞するのは、士気が低いからです。

頻繁に罰するのは、疲れているからです。

先暴而後畏其衆者 不精之至也

先に暴して

後に其の衆を畏れるは

不精の至りなり。

来委謝者 欲休息也

来りて委謝するは

休息を欲するなり。

兵怒而相迎 久而不合 又不相去也 必謹察之

兵怒りて相迎え、

久しくして合わず、

又相去らざるなり。

必ず謹んで之を察する。

先に乱暴にして、

後にその大多数を恐れるのは、

精を出さない、面倒くさがりの極みです。

来訪して贈答品で謝罪するのは、

休戦したいのです。

軍が怒って、お互いに向かいながら、

しばらくしても合戦しないで、

またお互いに撤退しない。

必ず慎重に観察するのです。

六 信頼と法令

兵非多益 無武進 足以併力料敵 取人而已

兵は多きを益とするに非ず、

武進する無く、

以て力を併せ敵を料るに足りて、

人を取るのみ。

夫 惟無慮而易敵者 必擒於人

夫れ

惟慮り無くして敵を易るは、

必ず人に擒にせらる。

軍は兵士が多ければ有利なわけではないのです。

武力で進むのではなく、

戦力を集中して、敵方の情報を明察して、

敵方を取るのみです。

そもそも、

よく考えることもしないで敵を侮っているのは、

必ず敵方の捕虜にさせられるのです。

卒未親附而罰之 則不服

卒、未だ親附せずして之を罰すれば、
則ち服せ不。

不服則難用也

服せざれば則ち用い難し。

卒已博親而罰不行 則不用

卒、已に博親せるに罰行われ不れば、
則ち用う不。

故 合之以交 齊之以武

故に、之を合するに交を以てし、
之を齊うるに武を以てす。

是謂必取

是を必ず取ると謂う。

兵士が、いまだ付き親しんでいないのに罰すれば、
心服しないのです。

心服しないと、運用し難いのです。

兵士が、すでに慣れ親しんで罰が行われないと、
運用するができないのです。

だから、兵士に合わせるのに交流します。
兵士を整えるのに刑罰するのです。

これを必ず取ると云うのです。

令素行以教其民者 民服

れいもと

おこな

令素より行われて、

もつ

そ たみ

おし

以て其の民に教うれば、

たみふく

民服す。

令不素行以教其民 民不服

れいもと

おこな

令素より行われ不して、

もつ

そ たみ

おし

以て其の民を教うれば、

たみふく

ず

民服せ不。

令素行者 与衆相得也

れいもと

おこな

令素より行われるれば、

しゆう

あい え

衆と相得るなり。

法令が平素より行われていて、

それで庶民に教えるのなら、

庶民は服従します。

法令が平素より行われなくて、

それで庶民に教えるのなら、

庶民は服従しないのです。

法令が平素より行われるのなら、

大多数と判り合えるのです。

第十篇 「地形」 勝利保全

一 地形の道理

孫子曰 地形有通者 有挂者 有支者 有隘者 有險者 有遠者

孫子曰く。

地形に、

通は有り、

挂は有り、

支は有り、

隘は有り、

險は有り、

遠は有り。

孫先生は云います。

戦場の地形に、

「通」があります。

「挂」があります。

「支」があります。

「隘」があります。

「險」があります。

「遠」があります。

我可以往 彼可以来 曰通

我われもつ以て往ゆく可べく

彼かれもつ以て来きたる可べきを

通つうと曰いう。

通形者 先居高陽 利糧道 以戰 則利

通つうの形かたちには、

先さきに高陽こうように居おり、

糧道りようどうを利りし、

以もつて戰たたかえば、

則すなわち利りあり。

身方から行けるし、

敵方が来れるのを

「通」と云います。

※ 「通」とは、四方に広く通じる道です。

「通」の形は、

敵方より先に高地の陽当たりに陣取り、

食料の補給路を有利に確保して、

こうして戦えば、

有利になります。

可以往 難以返 曰挂

以て往く可くして、

以て返り難きを

挂と曰う。

挂形者 敵無備 出而勝之

挂の形は、

敵に備え無ければ、

出でて之に勝つ。

敵若有備 出而不勝 難以返 不利

敵若し備え有れば、

出でて勝たず、

以て返り難くして不利。

その道に沿って進むはできても、

引き返すが難しいのは、

「挂」と云います。

※ 「挂」とは、途中に難所のある道です。

「挂」の形は、

敵方に備えがないなら、

出撃して敵方に勝ちます。

もし敵方に備えがあるなら、

出撃しても勝ちません。

引き返すのが難しいので不利です。

我出而不利 彼出而不利 曰支

我出でて不利、

彼も出でて不利を、

支と曰う。

支形者 敵雖利我 我無出也

支の形は、

敵我を利すと雖も、

我出ずる無かれなり。

引而去之 令敵半出而撃之 利

引きて之を去り、

敵をして半ば出でしめて之を撃つは

利。

身方が出撃して不利になり、

敵方も出撃して不利になるのは、

「支」と云います。

※ 「支」とは、脇道に分岐する道です。

「支」の形では、

敵方が身方に利益を示したとしても、

身方から出撃してはいけません。

引き返して、「支」から離れ去ります。

敵方の半数を出撃させて、その敵方を撃破するのは、有利です。

隘形者 我先居之 必盈之 以待敵

隘あいの形かたちは、

我先われまず之これに居おれば、

必かならず之これを盈みたして

以もつて敵てきを待まつ。

若敵先居之 盈而勿従 不盈而従之

若もし敵てき先さきに之これに居おり、

盈みつれば従したがう勿なかれ、

盈みた不ざれば之これに従したがう。

※ 「隘あい」とは、急に道幅が狭くなる道です。

「隘あい」の形では、

身方が先に布陣しているのなら、

必ず道の狭まる場所に兵力を密集してから、

敵方を待ちます。

もし敵方が先に道の狭まる場所に布陣しており、

敵兵力が密集しているのなら、攻撃してはいけません。

敵兵力が密集していないのなら、攻撃します。

険形者 我先居之 必居高陽 以待敵

険けんの形かたちは、

我先われさきに之これに居おれば、

必かならず高陽こうように居おりて

以もつて敵てきを待まつ。

若敵先居之 引而去之 勿徒也

若もし敵先てきさきに之これに居おれば、

引ひきて之これを去さりて

徒したがう勿なかれ。

※ 「険けん」とは、高く険しい道です。

「険けん」の形では、

身方が先に布陣しているのなら、

必ず高くて日当たりの良い場所に居て、

敵方を待ちます。

もし敵方が先に布陣しているのなら、

引き返して「険けん」から去ります。

攻撃してはいけません。

遠形者 勢均 難以挑戰 戰而不利

遠の形は、

えん かたち

勢均ければ

いきおいひとし

以て戦を挑み難く、

もつ たたかい いど

戦いて不利。

がた

凡此六者 地之道也

およ

凡そ此の六つは

およ

地の道なり。

将之至任 不可不察也

しょう

将の任に至りて、

いた

察せざる可から不なり。

※ 「遠」とは、敵身方の領地から遠く離れる場です。

「遠」の形では、

勢力が均一なら、

戦いを挑み難く、

戦うと不利です。

およそこれら六つは、

地形についての道理です。

指揮官の任務に至るなら、

推察しないわけにはいかないのです。

二 敗北の道理

故兵 有走者 有弛者 有陷者 有崩者 有乱者 有北者

故に兵には、

走る有り、

弛む有り、

陥る有り、

崩れる有り、

乱れる有り、

北ぐる有り。

凡此六者 非天地之災 将之過也

凡そ此の六つは

天地の災に非ず、

将の過なり。

そして軍には、

「はしる」があります。

「ゆるむ」があります。

「落ちる」があります。

「崩れる」があります。

「乱れる」があります。

「逃げる」があります。

おおよそこれら六つは、

自然の災害ではありません。

指揮官の過失です。

夫勢均 以一擊十 曰走

夫れ勢均いきおひひとしきして、

一を以て十を撃つは、

走と曰う。

卒強吏弱 曰弛

卒の強つよくして吏の弱よわきは、

弛と曰う。

吏強卒弱 曰陷

吏の強つよくして卒の弱よわきは、

陷と曰う。

そもそも、敵方と身方の勢力が均一で、

人数の十倍を攻撃するのなら、

「はしる」と云います。

兵士が強くて、武官が弱いのは、「ゆるむ」と云います。

武官が強くて、兵士が弱いのは、「落ちる」と云います。

大吏怒而不服 遇敵愾而自戰 將不知其能 曰崩

大吏怒りて服せず、

敵に遭えば懟みて自ら戦い、

將は其の能を知らざるは、

崩と曰う。

將弱不嚴 教道不明 吏卒無常 陳兵縱橫 曰乱

將の弱くして嚴ならず、

教道は明かなら不して、

吏卒は常無く

兵を陳ぬるに縱横なるは、

乱と曰う。

上級武官が怒って現場指揮官の命令に服従せずに、

敵方に遭遇して、恨みから勝手に戦い、

現場指揮官が、その上級武官の能力を知らないのは、

「崩れる」と云います。

指揮官が弱くて嚴しさがなければ、

軍令も明白にならずに、

武官と兵士の関係性に定まりなく、

軍の陣立ても勝手気ままは、

「乱れる」と云います。

将不能料敵 以少合衆 以弱擊強 兵無選鋒 曰北

将しやうの敵てきを料はかる能あたわ不ず、

小しやうを以もつて衆しゆうに合あわせ、

弱じやくを以もつて強きやうを撃うち、

兵へいに選せん鋒ぼう無なきは、

北にぐると曰いう。

凡此六者 敗之道也 将之至任 不可不察也

凡およそこの六むつつは

敗はいの道みちなり。

将しやうの任にんに至いたり、

察さつせ不ざる可べから不ずなり。

指揮官が敵方の情報を明察できずに、

少人数で大人数の敵方に合わせる場合、

弱い勢力で強い勢力を攻撃する場合、

軍に選抜かれた先鋒の武官がいない場合は、

「逃げる」と云います。

およそこれら六つは

敗北の道理です。

指揮官の任務に至るなら、

推察しないわけにはいかないのです。

三 上将の道理

夫地形者 兵之助也

夫れ地形は兵の助けなり。

料敵制勝 計險易遠近 上将之道也

敵を料り勝を制し、

險易、遠近を計るは、

上将の道なり。

知此而用戦者 必勝 不知此而用戦者 必敗

此れを知りて 戦に用うれば、

必ず勝ち、

此れを知らずして 戦に用うれば、

必ず敗る。

そもそも地形は軍の補助です。

敵方の情報を明察し、勝利を制し、
地形が険しいか易しいかを計算するのは、
上役指揮官の役割です。

これらを知って戦いに用いたなら、
必ず勝ちます。
これらを知らずに戦いに用いたなら、
必ず敗れます。

故 戦道必勝 主曰無戦 必戦可也

ゆえ

戦道必勝たば、

主は戦う無かれと曰うも

必ず戦いて可なり。

戦道不勝 主曰必戦 無戦可也

戦道勝た不れば、

主は必ず戦えと曰うも

戦う無くして可なり。

こういう次第にて、

戦いの道理で必ず勝つなら、

君主が戦わないよう命じても、

必ず戦うので構わないのです。

戦いの道理で勝たないなら、

君主が必ず戦うように命じても、

戦わなくても構わないのです。

故 進不求名 退不避罪

故に

進んで名を求め不、

退いて罪を避け不、

唯民是保 而利合於主

唯民を是保ちて

利の主に合う。

国之宝也

之は国の宝なり。

したがって、

戦いへ進んで名を求めないのです。

戦いから退いて罪を避けないのです。

ただ庶民の生命を保ち、

利益が君主に合うのです。

このような現場指揮官は、国の宝です。

四 兵士の道理

視卒如嬰兒 故 可与之赴深谿

卒を視る 嬰兒の如し、

故に、之と深谿に赴く可し。

視卒如愛子 故 可与之俱死

卒を視る 愛子の如し、

故に、之と俱に死す可し。

厚而不能使 愛而不能令 乱而不能治 譬若驕子 不可用也

厚くして使う能わ不、

愛して令する能わ不、

乱れて治むる能わ不、

譬えば驕子の若く、

用う可から不なり。

兵士を赤ん坊のように見るのです。

そうすると、兵士と深い谷底へ行けるのです。

兵士を愛する我が子のように見るのです。

そうすると、兵士と共に死ねるのです。

手厚いだけでは使えません。

愛するだけでは命令できません。

乱れても治められません。

たとえば、驕った子供のように、

用いてはならないのです。

五 道理の活用

知吾卒之可以撃 而不知敵之不可撃 勝之半也

吾が卒の以て撃つ可きを知りて、

敵の撃つ可から不を知らざるは、

勝の半ばなり。

知敵之可撃 而不知吾卒之不可撃 勝之半也

敵の撃つ可きを知りて、

吾が卒の以て撃つ可から不を知らざるは、

勝の半ばなり。

知敵之可撃 知吾卒之可以撃 而不知地形之不可以戦 勝之半也

敵の撃つ可きを知り、

吾が卒の以て撃つ可きを知りて、

地形の以て戦う可から不を知らざるは、

勝の半ばなり。

身方の兵士にて「攻撃すべき」を知っても、

敵方の「攻撃してはならない」を知らないでは、

勝利は半分です。

敵方の「攻撃すべき」を知っても、

身方の兵士にて「攻撃してはならない」を知らないでは、

勝利は半分です。

敵方の「攻撃すべき」を知って、

身方の兵士にて「攻撃すべき」を知って、

地形にて「戦うべきではない」を知らないでは、

勝利は半分です。

六 道理にて迷わず困らず

故 知兵者 動而不迷 拳而不窮

故に、兵を知るは、

動いて迷わ不、

拳げて窮せ不。

故曰 知彼知己 勝乃不殆

故に曰く、

彼を知り己れを知れば、

勝、乃ち殆うから不。

知地知天 勝乃可全

地を知り天を知れば、

勝、乃ち全うす可し。

だから軍事を知ると、

行動しても迷わないのです。

拳兵して、困窮しないのです。

だから軍は、

敵方を知り身方を知れば、

勝利に危険を含まないのです。

地を知り天を知れば、

勝利は保全されるのです。

第十一篇 「九地」 役割ごとの仕事

一 九つの状況

孫子曰 用兵之法

孫子曰く。

孫子曰く。

兵を用うる法は、

有散地 有輕地 有争地 有交地 有衢地 有重地

有泛地 有圜地 有死地

散地有り、輕地有り、争地有り、

交地有り、衢地有り、重地有り、

泛地有り、圜地有り、死地有り。

孫先生は云います。

軍を運用する方法です

「散地」があります。

「輕地」があります。

「争地」があります。

「交地」があります。

「衢地」があります。

「重地」があります。

「泛地」があります。

「圜地」があります。

「死地」があります。

諸侯戰其地 為散

諸侯が其の地に戦うは、

散と為す。

入人之地而不深者 為輕

人の地に入りて深からずは、

輕と為す。

我得則利 彼得亦利者 為爭

我得れば則ち利あり、

彼得るも亦利なるは、

争と為す。

一・諸侯がみずからの領地で戦うのは、

「散地」と為ります。

二・敵方の領地に入り深くないは、

「輕地」と為ります。

三・身方が得れば利益があり、敵方が得ても利益があるの

は、「争地」と為ります。

我可以往 彼可以来者 為交

我われもつ以て往ゆく可べく、

彼かれもつ以て来きたる可べきは、

交こうと為なす。

諸侯之地三属 先至而得天下之衆者 為衢

諸侯しよこうの地ち三属さんぞくして、

先さきに至いたりて天下てんかの衆しゆうを得えるは、

衢くと為なす。

入人之地深 倍城邑多者 为重

人ひとの地ちに入いりて深ふかく、

城邑じよういふを倍そむくに多おおきは、

重ちゆうと為なす。

四 身方が行くことができ、

敵方も来たれるのは、

「交地」と為ります。

五 諸侯の領地が三方に接していて、

先に至ると天下の大多数の賛同を得られるのは、

「衢地」と為ります。

六 敵方の領地に深く入り、

敵方の城を後方に多いのは、

「重地」と為ります。

行山林 沮澤 凡難行之道者 為泛

山林、險阻、沮沢、

凡そ行き難きの道は、

泛と為す。

所由入者隘 所從歸者迂 彼寡可以擊吾衆者 為圉

由りて入る所の隘く、

從りて歸る所の迂にして、

彼の寡にして以て吾の衆を撃つ可きは、

圉と為す。

疾則存 不疾則亡者 為死

疾は則ち存し、

疾は戦わねば則ち亡ぶは、

死と為す。

七. 山林、険しい地域、沼沢地など

行き難い経路は、

「泛地」と為ります。

八. 經由して入る通路が狭くて、

從つて歸る経路は曲がりくねり、

敵方が少人数としても、身方の大人数を撃破できるは、

「圉地」と為ります。

九. 疾苦で戦うなら生き延びて、

疾苦で戦えないなら、亡んでしまうは、

「死地」と為ります。

※ 「疾苦」は悩み苦しむこと。力の限り戦う意図。

二 九地の行動原則

是故 散地則無戰

是の故に、

散地には則ち戦う無く、

輕地則無止

輕地には則ち止まる無く、

争地則無攻

争地には則ち攻むる無く、

交地則無絶

交地には則ち絶つ無く、

したがって、

「散地」は、戦場にしてはならないのです。

「輕地」は、止まってはならないのです。

「争地」は、攻めてはならないのです。

「交地」では、軍列を絶ってはならないのです。

衢地則合交

くち すなわ こうあ
衢地には則ち交を合わせ、

重地則掠

ちようち すなわ かす
重地には則ち掠め、

泛地則行

はんち すなわ ゆ
泛地には則ち行き、

困地則謀

いち すなわ はか
困地には則ち謀り、

死地則戦

しち すなわ たたか
死地には則ち戦う。

「衢地」では、諸侯と親交を結びます。

「重地」では、目を掠めて通り過ぎます。

「泛地」では、立ち止まらずに行きます。

「困地」では、計略します。

「死地」では、戦います。

三 戦闘の行動原則

所謂古善戦者 能使敵人前後不相及也

いわゆるいにしえ

よ たたか

所謂 古の善く戦うは、

能く敵人をして前後相及ば不なり。

よ てきじん

まえうしろあいおよ

ず

衆寡不相恃 貴賤不相救 上下不相扶 卒離而不集 兵合而不斉

衆寡相恃ま不。

しゅうかあいたの

ず

貴賤相救わ不。

きせんあいく

ず

上下相扶け不。

うえしたあいたす

ず

卒離れて集まら不。

そつはな

あつ

ず

兵合うも斉わら不。

へいあ

ことの

ず

合於利而動 不合於利而止

利に合いて動き、

り あ

うご

利に合わ不して止む。

り あ

ず

や

いわゆる古来の巧妙に戦うは、

敵方の兵士に前と後ろで連絡できないようにします。

大人数と少人数で、お互いに頼れないようにします。

身分の貴賤で、お互いに救えないようにします。

役職の上下で、お互いに扶けないようにします。

兵士が離散して集合しないのです。

軍が合っても、整列しないようにするのです。

有利な状況に合えば行動します。

有利な状況に合わなければ停止します。

四 整う敵方の迎撃

敢問 敵衆以整將來 待之如何

敢て問う、

敵は衆く以って整いて將に來らんとす。
之を待つに如何。

曰 奪其所愛 則聽矣

兵之情主速也 乘人之不給也 由不虞之道 攻其所不戒也

曰く、

其の愛する所を奪えば、

則ち聽く。

兵の情は速なるを主とすなり。

人の給わ不るに乗じるなり。

虞ら不るの道に由り、

其の戒め不る所を攻むるなり。

敢えて問います。

敵方が大人数で整列して、まさに攻めて来るところです。
これをどのように待つのが良いでしょうか？

先に敵方の好み望む場所を奪えば、

敵方は言うことを聴くのです。

軍の情報は迅速なのが第一優先です。

敵方の準備不足を利用します。

敵方の思いもよらない道理を経由して、

敵方の備えのない場所を攻撃します。

五 兵士の仕事は死力を尽くす

凡為客之道 深入則博 主人不克 掠於饒野 三軍足食

およ ぎやく
凡そ客たるの道、

ふか い すなわ あつ しゅじんか
深く入れば則ち博まりて主人克た不。

じょうや かす さんぐん しょく た
饒野に掠めて、三軍は食に足す。

謹養而勿勞 併氣積力 運兵計謀 為不可測 投之無所往 死且不北

死焉不得 士人尽力

つつし やしな ろう な
謹み養いて勞する勿く、

き あわ ちから つ
気を併せ力を積みて

へい めぐ けいぼう
兵を運らし計謀して、

はか べ ず な
測る可から不を為し、

これ ゆ ところ な とう
之を往く所無きに投じれば、

し かつ かに ず
死すとも且つ北げ不。

し いづく し じんちから つく えざ
死せば焉んぞ士人力を尽すを得不らん。

およそ敵方へ進行する道理は、

深く入ると兵士が集中するから、現地軍は対抗できないの
です。

肥沃な領土を掠奪すれば、全軍の食料も充足します。

慎重に休養させると疲労することなく、

士気の一つあわせて、戦力を蓄積し、

軍を運用し計略し、

移動先を推測できないようにして、

軍を往来しない状況に投入すると、

兵士は死んでも逃げたりしないのです。

死ぬのなら、どうして兵士と指揮官は力を尽くさないだろ
うか。

兵士甚陥則不懼 無所往則固 深入則拘 不得已所往則闘

へいし はなは おちい 深入 拘 不 得 已 所 往 則 闘

往く所無ければ則ち固く、

深く入れば則ち拘し、

已むを得ざる所に往けば、則ち闘う。

兵士は、あまりにも危険になると恐れなくなります。

行き場所が無くなると、強固になります。

敵方に深く入り込むと、団結します。

やむを得ない状況では、闘うのです。

六 兵士を逃げさせない

是故 不調而戒 不求而得 不約而親 不令而信

是の故に、

調べ不して戒め、

求め不して得て、

約せ不して親しみ、

令せ不して信なり。

禁祥去疑 至死無所之

祥を禁じ疑いを去らば、

死に至るまで之く所無し。

だから、

そういう軍では、調べずに戒め、

求めなくても得られ、

約束しなくても親しみ、

命令しなくても信じるのです。

吉祥きつしやう

の占いを禁止して、疑いを取り除くならば、

死に至るまで逃げたりはしないのです。

吾士無余財 非惡貨也 無余死 非惡壽也

吾が士に余財無し、

貨を惡むに非ずなり。

余死無し、

壽を惡むに非ずなり。

令發之日 士座者涕霑襟 臥者涕交頤

令の發するの日、

士の座するは涕、襟を霑し、

臥するは涕、頤に交わる。

投之無所往者 諸 劇之勇也

之を往く所無きに投じれば、

諸劇の勇なり。

身方の兵士に余分な財貨はなくても、
財貨を嫌っているのではないのです。
ここで死ぬしかないとしても、
長壽を嫌っているのではないのです。

命令が發せられた日に、

座わる兵士は、涙が襟を濡らします。

横たわる兵士は、涙があごに交わります。

兵士を逃げ場のない戦場に投入すれば、

専諸や曹劇のように勇敢になるのです。

※ 専諸と曹劇は史記の刺客列伝に記される人物

七 士官の仕事

故 善用軍者 譬如率然

故に

善く軍を用うるは、
譬えば率然の如し。

率然者 恒山之蛇也

率然とするは恒山の蛇なり。

撃其首則尾至 撃其尾則首至 撃其中則首尾俱至

其の首を撃てば則ち尾至り、
其の尾を撃てば則ち首至り、
其の中を撃てば則ち首尾俱に至る。

したがって、

巧妙に軍を運用するのは、
たとえば率然のようです。

率然とは、恒山の蛇です。

その首を攻撃すると、尾が反撃してきます。
その尾を攻撃すると、首が反撃してきます。
その腹を攻撃すると、首と尾の両方で反撃してきます。

敢問 兵可使若率然乎

敢あえて問とう、

兵へいは率然そつぜんの若ごとくなら使しむ可べきか。

曰可

曰いわく、可かなり。

越人えつひと与ご呉人ごひと相あいに悪く也 当あた其その同おな舟ふね而を济わた也

相救あいに若ごと遇あ風かぜ 如ごと左ひだり右みぎ手て

越人えつひとと呉人ごひととの相あいに悪くむなり。

其そのの舟ふねを同おなじくして济わたりてなり。

若かぜし風かぜに遭あうなら相救あいにう。

左ひだり右みぎの手ての如ごとし。

敢えて問います。

「軍は、恒山こうざんの蛇のようにできるだろうか？」

「できる」と答えます。

越人と呉人は互いに憎みあいます。

同じ船に乗って川を渡ります。

もし風にあつたなら、お互いに救います。

右手と左手のようになります。

是故 方馬埋輪 未足恃也

是の故に、馬を方べ輪を埋むるも、未だ恃むに足らざるなり。

齊勇若一 将之道也

勇を齊えて一の若くは将の道なり。

剛柔皆得 地之利也

剛柔皆得るは地の利なり。

故 善用兵者 攜手若使一 使人不得已也

故に善く兵を用うるは、

手を攜えて一を使うが若くす。

使う人をして已むを得なければなり。

こういうわけで、馬をつなぎ止め、車輪を土に埋めても、それでも頼りにするには足りないのです。

勇ましさに整えて一つにするのは、指揮官の道理なのです。

剛と柔の皆を得るのは、土地の有利なのです。

だから、巧妙に軍を運用するのは、

まるで手をつないで一つを使うかのようにして、使う兵士をやむを得ないとするからです。

八 将官の仕事

將軍之事 静以幽 正以治

將軍の事は、静かにして以て幽く、
正しくして以て治まる。

能愚士卒之耳目 使無之知

能く士卒の耳目を愚にして、
之を使って知る無し。

易其事 革其謀 使民無識

其の事を易え、其の謀を革め、
民を使って識る無し。

易其居 迂其途 使民不得慮

其の居を易え、其の途を迂にし、
民を使って慮るを得ず。

現場最指揮官の仕事は、静かにて深く、
正しくして治まるのです。

指揮官や兵士の耳や目を上手く誤魔化して、
軍の計画を知らせないようにするのは、

その仕事を変えて、その策謀を革新して、
庶民を使って識別されないようにするのは、

その軍營を変え、その行路を迂回して、
庶民を使って推測されないようにするのは、

帥与之期 **如登高而去其梯**

帥ひきいて之これと期きすれば、

高たかきに登のぼりて其その梯ていを去さるが如ごとく。

帥与之深入諸侯之地 而發其機 若驅群羊

帥ひきいて之これと深ふかく諸侯しよこうの地ちに入りて、

其その機きを發はつすれば、

群羊ぐんようを驅かるが若ごとし。

驅而往 驅而來 莫知所之

驅かられて往ゆき、

驅かられて来きたり、

之ゆく所ところを知しる莫なし。

軍を統率して任務を与えるには、

高きへ登らせて、その梯子はしごを取り去るようになります。

軍を統率して深く諸侯の領地に入って、

その決戦を發するなら、

羊の群れを追いやるようにするのです。

追いやられて行きます。

追いやられて来ります。

行き場所を誰も知らないのです。

聚三軍之衆 投之於險 此謂將軍之事也

三軍の衆を聚めて、

之を險に投じるは、

此を將軍の事と謂うなり。

九地之變 屈伸之利 人情之理 不可不察也

九地の変、

屈伸の利、

人情の利は、

察せざる可から不なり。

全軍の大部隊を集めて、

すべてを危険な地形へ投入するのは、

これを現場最高指揮官の仕事というのです。

九地の変化、

屈伸の有利、

人情の有利は、

推察しないわけにはいかないのです。

九 絶地は敵方領土

凡為道 深則搏 浅則散

凡そ道は、

深ければ則ち搏まり、

浅ければ則ち散なり。

去国越境而師者絶地也 四徹者衢地也 入深者重地也 入浅者轻地也

倍固前隘者圉地也 倍固前敵者死地也 无所往者窮地也

国を去り境を越えて師するは、絶地なり。

四徹は、衢地なり。

入る深きは、重地なり。

入る浅きは、軽地なり。

固を倍いて隘を前にするは、圉地なり。

固を倍いて前に敵は、死地なり。

往く所なきは、窮地なり。

およそ、敵方に進撃する道理は、

深ければ集中して、

浅ければ分散します。

本国を去り国境を越えて軍を進めた所は「絶地」です。

絶地の内、四方に通ずるは「衢地」です。

絶地の内、深く侵入するは「重地」です。

絶地の内、浅く侵入するは「軽地」です。

絶地の内、背後が険しく前方の狭いは「圉地」です。

絶地の内、背後が険しく前方に敵は「死地」です。

行き場のないは「窮地」です。

十 九地ごとの指揮目標

是故散地 吾将一其志

是の故に

散地には、吾将に其の志を一にせんとす。

輕地 吾将使之儂

輕地には、吾将に之をして儂せ使めんとす。

争地 吾将使不留

争地には、吾将に留まら不らし使めんとす。

交地也 吾将固其結

交地には、吾将に其の結びを固くせんとす。

衢地也 吾将謹其恃

衢地には、吾将に其の恃みを謹まんとす。

これゆえに、

「散地」では、身方の志を一つにしようとしています。

「輕地」では、身方が離れないようにします。

「争地」では、敵方が留まる理由を失くすようにします。

「交地」では、身方の団結を固めようとします。

「衢地」では、身方の頼みを慎重にしようとしています。

重地也 吾將趣其後

重地には、吾將に其の後ろに趣かんとす。

泛地也 吾將進其途

泛地には、吾將に其の塗を進まんとす。

困地也 吾將塞其闕

困地には、吾將に其の闕を塞がんとす。

死地也 吾將示之以不活

死地には、吾將に之に示すに活き不るを以てせん
とす。

「重地」では、身方が本来の目標へ向かうようにします。

「泛地」では、身方が早く通り過ぎるようにします。

「困地」では、身方の逃げ道をふさごうとします。

「死地」では、身方に生き延びられないを示します。

十一 諸侯の仕事

諸侯之情 選則禦 不得已則鬪 過則從

諸侯の情、

選べば則ち禦ぎ、

已むを得なければ則ち鬪い、

過ぐれば則ち従う。

諸侯の事情では、

戦力がおよぶなら、抵抗します。

やむを得ないなら、鬪います。

戦力差が過ぎるなら、従順になります。

十二 郷導の仕事

是故不知諸侯之謀者 不能預交

是の故に

諸侯の謀を知らなければ、
予め交わるに能わ不。

不知山林 險阻 沮沢之形者 不能行軍

山林、險阻、沮沢の形を知らざれば、
軍を行るに能わ不。

不用郷導者 不能得地利

郷導を用い不るは、
地の利を得るに能わ不。

だから、

諸侯の計略を知らなければ、
前もって外交しておけないのです。

山林、険しい地形、沼沢地の地形を知らないのでは、
軍を進めることはできないのです。

その土地の案内役を使えないのでは、
地形の利益を得ることはできないのです。

十三 霸王の仕事

四五者 **一不知** **非王** 覇之兵也

四つ五つは、

一を知らざれば、

霸王の兵に非ずなり。

彼王覇之兵 伐大国 則其衆不得聚

夫れ

霸王の兵、大国を伐てば、

則ち其の衆聚まるを得ず、

威加於敵 則其交不得合

威を敵に加うれば、

則ち其の交り合うを得ず。

四つと五つの九地は、

その一つでも知らないのでは、

霸王の軍ではないのです。

そもそも、

霸王の軍は、大国を討伐すれば、

その大国の大部隊も集合できないのです。

威勢が敵方に加われば、

その敵方は他国と同盟できないのです。

是故 不事天下之交 不養天下之歡 信己之私 威加於敵

是の故に

天下の交に事えず、天下の歡を養わず、己の私を信べて、威は敵に加わる。

故其城可拔也 城可墮也

故に其の城は抜く可しなり。

城は墮る可しなり。

無法之賞 無正之令

無法の賞、

無政の令、

犯三軍之衆 若使一人

三軍の衆を犯りて、

一人を使うが若し。

こういう次第で、

天下の外交に事えず、天下の歡喜も養わず、勝手気ままに振る舞うと、威勢は敵方に加わるのです。

だから、敵方の城は抜けるのです。敵方の城は破れるのです。

法にない賞、
政にない令、

全軍の大部隊を動かすのも、まるで一人を使うようなものです。

犯之以事 勿告以言

これを犯るに事を以てして、
告ぐるに言を以てする勿れ。

犯之以害 勿告以利

これを犯るに害を以てして、
利を以て告ぐる勿れ。

投之亡地然而後存 陷之死地然後生

之を亡ぶ地に投じて然る後に存し、
之を死す地に陥れて然る後に生く。

夫衆陷於害 然後能為敗

夫れ衆は害に陥りて、
然る後に能く敗を為す。

軍を動かすのに、仕事を与えるだけにして、

その理由を説明してはならないのです。

軍を動かすのに、損害だけを知らせて、

その利益を説明してはならないのです。

軍を滅亡すべき戦地へ投入してこそ、後に存続するのです。

軍を死すべき戦地へ陥れてこそ、後に生き延びるのです。

そもそも、大部分の兵士は、損害に陥ってこそ、

後に敗するのです。

十四 巧みな仕事

為兵之事 在於順詳敵之意

兵を為すの事は、

敵の意を順詳するに在り。

并敵一向 千里殺將

敵を一向に并せて、

千里にして將を殺す、

此謂巧事

此れを巧みな事と謂う。

軍の成す仕事は、

敵方の意図に順じて調子をあわせるのです。

敵方の向かう先を一つにあわせて、

千里の遠方で、敵方の指揮官を殺すのです。

これを巧みな仕事というのです。

十五 開戦の仕事

是故政拳之日 夷関折符 無通其使

厲于廊上

以誅其事

是の故に、

政の挙るの日は、

関を夷め符を折りて

其の使を通じる無く、

廊の上に厲まし、

以て其の事を誅む。

こうしたわけだから、

開戦の政令が発動された日には、

関所を封鎖し、通行証を無効にして、

敵方の使節を通れなくします。

廟堂の上で研鑽し、

戦いの計画を決めます。

敵人開闔 必亟入之 先其所愛 微与之期 踐墨隨敵 以決戰事

敵人開闔すれば

必ず亟かに之に入り、

其の愛する所を先にして

微かに之と期し、

踐墨して敵に隨いて、

以て戰事を決す。

敵方の兵が防衛線に間隙を生じるなら、

必ずそこから迅速に侵入します。

敵方の重要な地域を先に占領して、

日時と場所をひそかに決めて、

敵方の進撃路に従い合わせて、

戦いの勝敗を決するのです。

是故 始如処女 敵人開戸 後如脱兎 敵不及拒

是の故に

始めは処女の如し、

敵人戸を開く、

後は脱兎の如し、

敵、拒ぐに及ばず。

こういう次第にて、

始まりは処女のように、

敵方の兵が入口を開いたら、

後は逃げ出した兎のように、

敵方は防ぎようがないのです。

第十二篇 「用間」 因果の間を用いる

一 敵情を察知する間諜

孫子曰 凡興師十万 出征千里 百姓之費 公家之奉 費日千金

孫子曰く。

およそ 師を興こすの 十万、

出征するの 千里なれば、

百姓の費、

公家の奉、

日に 千金を費す。

孫先生は云います。

およそ戦争を興すには十万の兵士を編成します。

千里の出征をすとなれば、

庶民の生活費、

国家の運営費、

日に 千金を費やします。

内外騒動 怠於道路 不得操事者 七十万家 相守数年 以争一日之勝

ないがいそうどう

内外騒動し、

どうろ おこた

道路に怠りて、

こと

事を操るを得ざるは、

しちじゆうまんか

七十万家、

あいまも すうねん

相守る数年にして、

もつ いちにち 勝ち あらそ

以て一日の勝を争う。

内と外で騒がしく動きます。

物資輸送に疲れ苦しみます。

農耕に従事できず収穫を得られないは、

七十万戸です。

お互いを守るまま数年して、

一日の決戦で勝を争うのです。

而 愛爵禄金宝 不知敵之情者 不仁之至也

非民之將也 非主之佐也 非勝之主也

而るに

爵禄金宝を愛しみて、

敵の情を知らざるは、

不仁の至りなり。

民の將に非ずなり。

主の佐に非ずなり。

勝の主に非ずなり。

それにもかかわらず、

爵位や俸禄や金や宝を惜しんで、

敵方の情報を知らないのは、

仁愛ではない、に至ります。

兵士の統率役とはいえません。

君主の補佐役とはいえません。

勝利の主体とはいええないのです。

故 明主賢將 所以動而勝人 成功出於衆者 先知也

故に、明主賢將の所以にて

動きて人に勝ち、

成功の衆より出ざるは、

先に知るなり。

先知者 不可取於鬼神 不可象於事 不可驗於度

先に知るは、

鬼神に取る可からず。

事に象る可からず。

度に驗す可からず。

必取於人 知者 知敵之情者也 故 用間

人に於ける知は必ず取る、

敵の情を知るなり。

故に間を用うる。

だから、聡明な君主や賢明な將軍を理由として、

動いて敵方に勝ちます。

他の人達よりも成功で抜きん出るのは、

先に知るからです。

先に知るのに、

鬼神から取ってはいけません。

天の事象からでもいけません。

天の計測や経験からでもいけません。

敵方の知識を必ず取るのです。

敵方の情報を知るのです。

だから、間諜を運用するのです。

二 間諜の五種類

有五

五あり。

有因間 有内間 有反間 有死間 有生間

因間いんかんあり。

内間ないかんあり。

反間はんかんあり。

死間しかんあり。

生間せいかんあり。

そこで間諜は五つです。

「因間」があります。

「内間」があります。

「反間」があります。

「死間」があります。

「生間」があります。

五間俱起 莫知其道 是謂神紀 人君之葆也

ごかんとも

お

五間俱に起こりて、

其の道を知る莫し、

これを

神紀と謂う。

じんくん

たから

人君の葆なり。

生間者 反報者也

せいかん

生間は、

かえ

ほう

反り報じるなり。

因間者 因其郷人而用者也

いんかん

因間は、

そ

きようじん

よ

もち

其の郷人に因りて用うなり。

五つの間諜が平行に起因して、

互いに知ることはありません。

これを「神紀」と云います。

庶民と君主にとって貴重です。

「生間」は、

敵方へ侵入を繰り返して諜報します。

「因間」は、

敵方に因果のある郷土民を諜報に用います。

内間者 因其官人而用者也

内間は、

其の官人に因りて用うなり。

反間者 因其敵間而用者也

反間は、

其の敵間に因りて用うなり。

死間者 為誑事於外 令吾間知之 而伝於敵間者也

死間は、

誑りの事を外に為し、

吾が間に令て之を知らしめ、

敵に伝うるの間なり。

「内間」は、

敵方の役人を諜報に用います。

「反間」は、

敵方の間諜を諜報に用います。

「死間」は、

虚偽の事件を外で為して、

配下の間諜に命じて情報を広めさせ、

敵方に伝えさせる間諜です。

三 間諜を使いこなす

故 三軍之親 莫親於間 賞莫厚於間 事莫密於間

故に

三軍の親しさは、

間より親しきは莫く、

賞は間より厚きは莫く、

事は間より密かなるは莫し。

非聖智不能用間 非仁不能使間 非微妙不能得間之葆

聖智に非ずは、間を用うるに能わ不、

仁に非ずは、間を使うに能わ不、

微妙に非ずは、間の葆を得るに能わ不。

そこで、

全軍の親密さは、

間諜よりも親しいはありません。

恩賞は間諜よりも厚いはありません。

任務に間諜よりも機密はありません。

聖智の境地に居ないのなら、間諜を起用できないのです。
仁愛の境地に居ないのなら、間諜を運用できないのです。
微妙の境地に居ないのなら、間諜の貴重を得られないので
す。

密哉 **密哉** 無所不用間也

つまびら
密 かなるかや、

つまびら
密 かなるかや、

かん もち ところな
間を用い 不る 所無し。

間事未発聞 **間**而先聞者 間与所告者 皆死

かんじいま はつ
間事未だ発せずと聞くに、

かんさき き
間先に聞こゆれば、

そ かん っ ところ
其の間と告ぐる所は、

みなし
皆死す。

機密であり、

機密であり、

間諜を用いない軍事はありません。

諜報活動が、いまだ発覚していないと聞いているにも関わらず、他の間諜から先に聞こえてきたなら、その諜報活動を行う間諜と、報告してきた間諜は、皆死罪とします。

四 必須の調査項目

凡 軍之所欲撃 城之所欲攻 人之所欲殺

必先知其 守將 左右 謁者 門者 舍人之姓名 令吾間必索知之

およ

凡そ

軍の撃たんと欲する所、

城の攻めんと欲する所、

人の殺さんと欲する所は、

必ず先に其の

守將、

左右、

謁者、

門者、

舍人の姓名を知り、

吾が間をして必ず之を索め知らしむ。

およそ

「撃ちたい軍」

「攻めたい城」

「殺したい人物」

では、必ず先にその

「守る将官」

「左右の将官」

「奏聞者」

「門を守る者」

「舍を守る役人」

の姓名を知ります。

身方の間諜に必ずこれらを調べさせるのです。

五 間諜の因果

必索敵人之間 来間我者 因而利之 導而舍之

かなら てきじん かん もと
必ず敵人の間を索めて、

われ きた かん
我に来る間は、

よ これ り
因りて之を利し、

みちび これ しゃ
導きて之を舍す。

故 反間可得而用也 因是而知之 故 郷間 内間 可得而使也

ゆえ
故に

はんかん え もち べ
反間得て用う可きなり。

これ よ これ し
是に因りて之を知る。

ゆえ
故に

きょうかん ないかん え つか べ
郷間、内間、得て使う可きなり。

必ず敵方の間諜を搜索します。

私に来る間諜は、

因果にて、その間諜に利益を与えます。

誘導して、その間諜を身方にします。

そこで

はんかん
「反間」として運用できるのです。

はんかん
「反間」によって敵方の情報を知ります。

こういう次第にて、

きょうかん ないかん
「郷間」「内間」の情報を得て、使うべきなのです。

因是而知之

これよ
是に因りて之を知る。

故 死間為誑事 可使告敵

ゆえ
故に

しかん
死間は誑り事を為して、
てき
敵に告げしむ可し。

因是而知之

これよ
是に因りて之を知る。

故 生間可使如期

ゆえ
故に

せいかん
生間は期の如くなら使む可し。

敵方の郷土民「郷間」によって敵方の情報を知ります。

こういう次第にて、

死を覚悟する「死間」は虚偽の事件を為して、
敵方に告げさせるが、できるのです。

敵方の役人「内間」によって敵の情報を知ります。

こういう次第にて、

繰り返し諜報する「生間」を計画的に使うが、できるので
す。

五間之事 必知之

ごかん こと
五間の事は、

かなら これ し
必ず之を知る。

知之必在於反間

これ し かなら はんかん あ
之を知るは必ず反間に在り。

故 反間不可不厚也

ゆえ
故に

はんかん あつ ざ べ ず
反間は厚くせざる可から不なり。

五とおりの間諜の情報を、
君主は必ず知っています。

それが知れるのは、必ず反間によります。

そこで、

反間は厚遇しないわけにはいかないのです。

六 間諜で大功を成す

昔 殷之興也 伊摯在夏 周之興也 呂牙在殷

昔、

殷の興こるや、伊摯は夏に在り。
周の興こるや、呂牙は殷に在り。

唯 明主賢將能以上智為間者 必成大功

唯、

明主賢將のみ能く上智を以て間と為して、
必ず大功を成す。

此兵之要 三軍之所恃而動也

此れ兵の要にして、

三軍の恃みて動く所なり。

昔、

殷王朝が始まる際には、伊摯は夏の国に在住した。
周王朝が始まる際には、呂牙は殷の国に在住した。

ただ

聡明な君主や賢い將軍のみ、知恵者を間諜とできて、
必ず大きな功業を成せるのです。

この間諜は戦争のかなめです。
全軍が頼り行動するのです。

第十三篇 「火陳」 名主は慎み良將は戒める

一 五火

孫子曰 凡**攻火有五**

孫子曰く。

凡そ火で攻めるに**五**有り。

一日火人 二日火積 三日火輜 四日火庫 五日火墜

一に曰く人を火く。

二に曰く積を火く。

三に曰く輜を火く。

四に曰く庫を火く。

五に曰く墜を火く。

孫先生は云います。

火の攻撃はおよそ五つです。

一に云うには「人」人々への火攻です。

二に云うには「積」集積への火攻です。

三に云うには「輜」輸送への火攻です。

四に云うには「庫」倉庫への火攻です。

五に云うには「墜」行路への火攻です。

※ 「五事」への攻撃を暗喩しています。

行火有因 因必素具

火ひを行おこなうには因いんあり、
因いんは必かならず素もとより具そなう。

発火有時 起火有日 時者 天之燥也

火ひを發はつするに時ときあり、
火ひを起おこすに日ひあり。
時ときとは天てんの燥かわけるなり。

日者 宿在 箕 壁 翼 軫也

凡此四者 風之起日也

日ひは宿しゆくの箕き、壁へき、翼よく、軫しんに在あるなり。
凡およそ此この四よつつは、風かぜ起おこるの日ひなり。

火攻の実行には、原因があります。
原因は、必ず平素より準備しておきます。

火攻の発現には、時節があります。
火勢を起こすには、適切な日があります。
時節とは、天氣の乾燥です。

適切な日とは、月のリズム二十八宿「箕」「壁」「翼」「軫」
です。
およそ、これら四つの宿は、風が吹きはじめる日です。

二 五火の変

凡火攻 必因五火之变而应之

凡そ火攻は、

必ず五火の変に因りて之に应じる。

火発於内 則早应之於外

火、内に発すれば、

則ち早く之に外より应じる。

火発其兵静 而勿攻

火、発して其の兵静かは、

攻むる勿れ。

極其火央 可從而従之 不可從而止之

其の火央を極め、

従う可くして之に従い、

従う可からざるして之を止める。

およそ火攻は、

必ず五つの火の変化に起因して应じます。

一・火が、敵方の内で発したなら、

早くに外からに呼应します。

二・火が発して、敵方が静かな際には、

攻めてはいけません。

その火勢を見極めて、

従うべきは従います。

従うべきでないなら止めます。

火可発於外 無待於内 以時発之

火、外より発す可くんば、

内に待つ無く、

時を以て之を發せよ。

火發上風 無攻下風

火、上風に發して、

下風を攻むる無かれ。

昼風久 夜風止

昼風は久しく、

夜風は止む。

凡軍必知有五火之變 以數守之

凡そ軍は必ず五火の變あるを知り、

數を以て之を守る。

三. 火を外から發せられるなら、

内から發するのを待つことなく、

時を見て火を發します。

四. 火が風上から發しているなら、

風下から攻撃してはいけません。

五. 昼の風は利用します。

夜の風は利用を止めます。

およそ軍隊は、必ず五つの火の變化を知り、

自然の法則にて守ります。

※ 「五變」に呼応しています。

三 火攻は明、水攻は強

故 以火佐攻者 明

故に

火を以て攻を佐くるは
明。

以水佐攻者 強

水を以て攻を佐くるは
強。

水可以絶 不可以奪

水は以て絶つ可くして、
以て奪う可からず。

だから、

火を攻撃の補佐とするのは、

明晰です。

※ 「勢」に呼応しています。

水を攻撃の補佐とするのは、

強大です。

※ 「形」と「詭道」に呼応しています。

水にて分絶できたとしても、

それをもって奪い取ることはできません。

四 国を安んじ軍を全うの道理

夫戦勝攻得 不随其功者凶

夫れ戦い勝ち攻め得て、

其の功に随わ不は凶なり。

命之日費留

之を命じて費留と曰う。

故曰 明主慮之 良将随之

故に曰く、明主は之を慮り、

良将は之に随う。

非利不動 非得不用 非危不戦

利に非ざれば動か不、

得るに非ざれば用い不、

危うきに非ざれば戦わ不。

そもそも戦闘に勝利を攻略し得たのに、

その成功に随わないのは、凶です。

これに命名して「費留」と云います。国力の浪費です。

したがって、聡明な君主はこれを深慮して、

良い将軍はこれに随います。

利益にならなければ動きません。

得るもの無ければ用いませぬ。

危うくなければ戦わないのです。

主不可以怒興軍

主は怒りを以て軍を興こす可からず。

将不可以愠戰

将は愠りを以て戦う可からず。

合於利而用 不合而止

利に合えば用い、

利に合わずして止む。

怒可復喜也 愠可復悦也

怒りは喜びに復る可しなり。

愠りは悦びに復る可しなり。

君主は、怒りから軍を興してはならないのです。

将軍は、愠りから戦闘してはならないのです。

利益に合えば運用します。

利益に合わなければ止まるのです。

怒りはやがて、喜びに回復できるでしょう。

愠りはやがて、悦びに回復できるでしょう。

愠りはやがて、悦びに回復できるでしょう。

亡国不可以復存 死者不可以復生

亡き国は以て存に復る可からず。
死は以て生に復る可からず。

故 明主慎之 良将警之

故に

明主は之を慎み、

良将は之を警む。

此 安国全軍之道也

此れ

国を安んじ

軍を全うするの道なり。

滅んだ国家は決して復権できません。
死も決して生に復帰するはないのです。

だから、

明晰な君主は、戦争を慎みます。
良き将軍は戦争を戒めるのです。

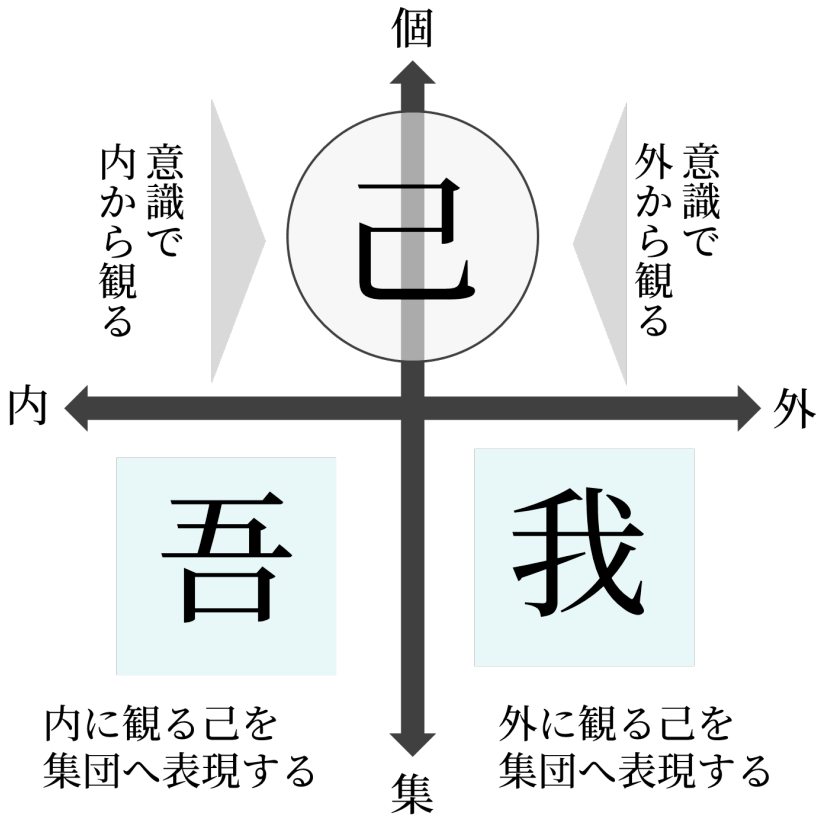
これが、

国家を安泰として、
軍隊を保全する道理なのです。

おわりに

ドラフト版です。自分自身で未だ納得できず、チェックの甘い部分のある状態で公開です。

「吾」は内に向けた言葉、「我」は外に向ける言葉とみなしています。「己」は方向を持たない属性値です。



参考文献

- [1] 浅野裕一、孫子 講談社学術文庫、講談社、1997.
- [2] 金谷治訳注、新訂 孫子、岩波書店、2001.
- [3] 武岡淳彦／監修、佐野寿龍／著、戦わずして勝つ 孫子兵法 その科学的体系と思想を講む、拓心観、1998.
- [4] 武内義雄、武内義雄全集 第七巻 諸子篇二、東京：角川書店、1979.